

44. 「日本語・琉球祖語から見た日本人の起源」

「日本語・琉球諸語による歴史比較言語学」の出版を機会に

日本古代史ネットワーク 古代史を解明する会

2024年9月14日

丸地三郎

- 「日本語・琉球諸語による歴史比較言語学」 著者は、平子達也/五十嵐陽介/トマ・ペラール
 - 歴史比較言語学の本で、琉球祖語の本では無い
 - 日本語や琉球諸語の例を多く取り上げて歴史比較言語学の手法を示す概説書
 - 帯封には、「文献に記録のない言語史をどのように再建するのか」と示す。
 - しかし、この本の紹介するインタビュー記事では、歴史比較言語学で判明した具体的内容を示している。
 - 日琉祖語を話していたグループは、
 - 稲作を日本列島に持ち込んだ人々と同一
 - 琉球諸語と日本語を細かく検討すると、稲についての言葉が共通している
 - それまで日本列島に住んでいて、別の言葉を話していた縄文人たちが住めない場所に住んだりしてどんどん増えていき、それに合わせて日琉祖語も広がっていったという仮説です。
 - 日琉祖語の姉妹言語が朝鮮半島の中心部に存在した跡がある。
 - 日本語の祖先は大陸のどこかからやって来て、朝鮮半島を経由して日本列島に定着し、広まった。
 - 琉球諸語は日本語とは、3～6世紀くらいに分岐した。
 - 分岐が起こった場所は九州でしょう。
 - 稲作が日本列島に伝えられた紀元前10世紀から紀元後3世紀頃の時点では分岐していなかった。

- 韓国が琉球祖語の起源との記述があるので、従来調べて来た朝鮮半島と日本の歴史を見直してみる。
 - 第32回「古代朝鮮と日本の歴史」復習
 - DNA解析 朝鮮半島南岸6000年前倭人・縄文人のDNA
 - 西北九州縄文人のDNA

パリ在住フランス人研究者が「日本語の起源」を追究する理由。文字なき時代の古（いにしえ）の姿はここまでわかった！

社会 2024年05月28日 取材・文/佐藤 崇



「日本語の祖先は、朝鮮半島から海を渡ってもたらされた説が有力です」と語るペラール氏

日本語・琉球諸語による

歴史比較言語学

平子達也
五十嵐陽介
トマ・ペラール

日琉諸語の例に基づく画期的な概説書

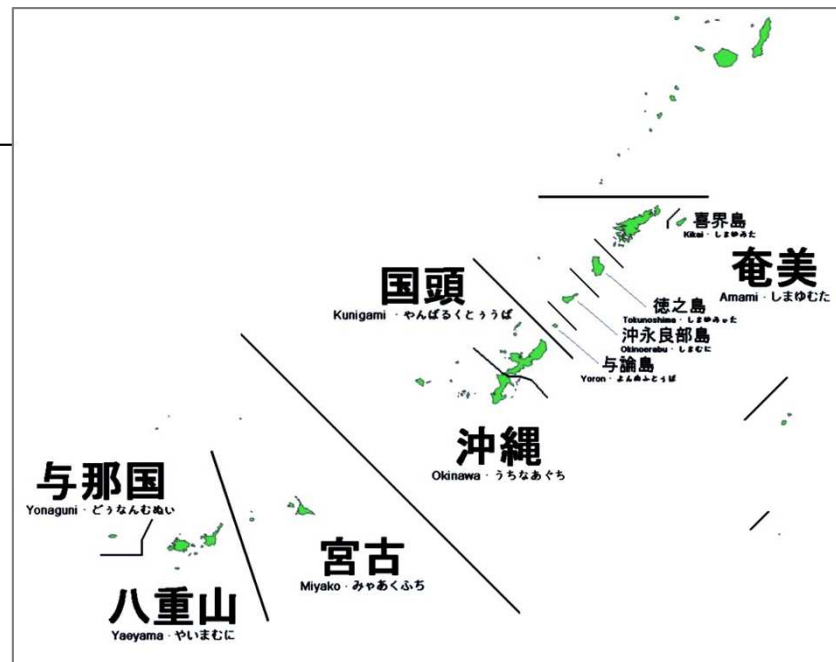
文献に記録のない
言語史をどのように
再建するのか



岩波書店
定価(本体3600円+税)

琉球・沖縄の言葉と日本語

- 琉球諸語/琉球語派は、日本の沖縄県と鹿児島県奄美群島で用いられる諸言語の総称。
 - 日本本土の日本語とともに日琉語族に属し、琉球語(りゅうきゅうご)とも呼称される。
- 沖縄本島以北の北琉球諸語(北琉球方言)と、宮古列島以南の南琉球諸語(南琉球方言)の2グループに大別できる。
- 日本語との対応関係：琉球諸語(琉球方言)と日本語の間には、母音・子音に一定の対応関係がある。

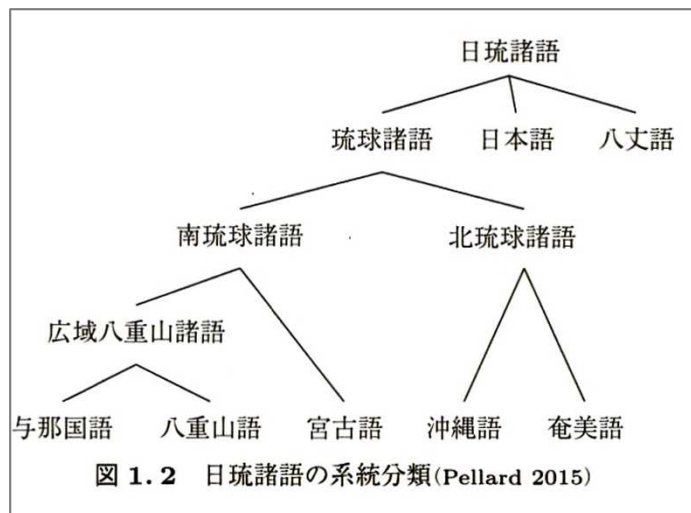


日本語	奄美大島 徳之島方言	沖永良部・与論・ 沖縄語	宮古語 八重山語	与那国語
あ a	あ a	あ a	あ a	あ a
え e	い i	い i	い i	い i
お o	う u	う u	う u	う u
い i	い i	い i	い i	い i
う u	う u	う u	う u	う u

- 子音では、日本語の語頭の八行子音が琉球諸語ではpまたは ϕ (F)になっている。
- 日本本土では、八行は奈良時代以前にp、平安時代から室町時代までは ϕ であった。
 - 琉球諸語(琉球方言)で古い発音を残している。

日琉諸語の系統分類

- 右図のように分類されている。



言語学に関して十分な見識の無い人間が紹介することは、不適切とは思いますが、紹介します。

- 出版社岩波書店の内容紹介

- 比較言語学の目的は、
 - 言語間の系統関係の確立にとどまらず、
 - 系統関係にある諸言語の祖語を再建し
- 各言語が祖語の状態から現在の状態に至るまでにどのように変化を遂げてきたのかを解明することにある。
- 文献に記録のない言語史を、比較言語学の手法によってどのように再建するのか。
 - 日琉諸語の例に基づいて解説する画期的な書

- 感想・レビューから抜粋

- 音声・音韻を比較検討することにより日本語の祖語を探る書であるけれど、用語がわかっていないと少してこずります。
- 当たり前なことだけど言葉って音声先、文字は後なんですよ。ね。
 - 時々忘れそうになるけど重要なことです。

- 歴史比較言語学の手法を示す概説書

- 言語のサンプルとして、日本語や琉球諸語の例を多く取り上げている本

- 第1章：言語史研究における比較方法の位置づけ
 - 最も古い文献＝古事記・日本書紀・万葉集に、記された言葉が、言語的に最も古いとは限らない
 - 方言は、その上代語の子孫と限らない。
 - 文献以前の日本語が存在する可能性がある。
 - 文献研究で最も古いアクセントが判る「院政期京都方言」のアクセント体系は、日琉祖語のアクセントの祖体系ではない。
 - 従来は、「院政期京都方言」のアクセント体系から日琉諸語は分岐したと見られていた。
 - 日琉諸語のアクセント体系などを調べ直すことで、祖先の言語を再建できる可能性がある。
 - その方法を以下の方法から検討する。
- 第2章：言語は変化する
 - 言語は変化するので、諸語(方言)毎に起きる変化を、歴史的に捉えることができ、その方法を論じる。
- 第3章：比較の方法
 - 諸語(方言)毎に変化を歴史的に捉え、変化を比較する方法を論じる。
- 第4章：内的再建
 - 変化を捉え、比較することにより、諸語(方言)を再建する方法を論じる。
- 第5章：系統樹の推定
 - 諸語(方言)が把握できると系統樹が推定できが、その方法を論じる。
- 第6章：祖語の再建
 - 祖語を再建する方法を論じ、日琉祖語再建の問題を論じる。
- 第7章：方言的なアプローチと文献資料を用いた日本語史の再建
 - 祖語・系統樹とは逆に、各地方・区域の方言やその変化を明らかにする方法を論じる。
- ✓ この本は、「歴史比較言語学」について記述しており、「日本語・琉球諸語の解明」自体を記載していない。
 - 従ってインタビュー記事のような起源・ルートなどの記述は無い。改めて、以降、インタビュー記事を確認！

タイトル：『パリ在住フランス人研究者が「日本語の起源」を追究する理由。

文字なき時代の古(いにしえ)の姿はここまでわかった!』 2024/5/28取材・文/佐藤喬
<https://wpb.shueisha.co.jp/news/society/2024/05/28/123352/>

- 日本語は、大昔はどのような姿だったのか？
 - 文献の記録がない時代はどんな発音で、どんな単語があったのか？ そんな疑問に答える本が出た。
 - それが『日本語・琉球諸語による歴史比較言語学』だ。
- 大昔、例えば3000年くらい前の日本列島では、さまざまな言葉が話されていたと考えられています。でもそのうち日琉祖語だけが生き残り、今の日本語に進化したということなんですね。
 - 消滅の危機にあるアイヌ語のように、ほかにもたくさんの言語があったと推測されています。
- **日琉祖語を話していたグループは、**
 - **稲作を日本列島に持ち込んだ人々と同一で、(中略)**
 - それまで日本列島に住んでいて、別の言葉と話していた縄文人たちが住めない場所に住んだりしてどんどん増えていき、
 - それに合わせて日琉祖語も広がっていったという仮説です。
- **日琉祖語の姉妹言語が朝鮮半島の中心部に存在した跡があるんです。**
 - 例えば、今の日本語の「兎」「角」に当たる単語を含む地名が古代に存在したんですね。
 - しかし、その言語が後にどう進化したかはわかっていません。
 - ただ、今の朝鮮半島で話されている言語は日琉祖語とは別系統の言語ですから、少なくとも朝鮮半島で滅んだことは間違いない。
- つまり、日本語の祖先は大陸のどこかからやって来て、
 - **朝鮮半島を経由して日本列島に定着し、広まったわけですね。**

- どうやってそんなことを解明したんですか？
- 私たちの分野では、さまざまな言語の歴史をまとめて表す系統樹を作ります。
 - 先ほど言語の歴史を生物の進化にたとえましたが、
 - 生物学では進化の道筋を示す系統樹を作りますよね。
- 沖縄や奄美諸島で話されている琉球諸語は、日本語とは別の言語、
 - つまり動物でいう別の種だと見なすことができますが、
 - **両者は3~6世紀くらいに分岐したと考えています。**
- 琉球諸語と8世紀の日本語を比較すると、
 - **8世紀の日本語ではすでに消えつつあった特徴が琉球諸語には残っているんですね。**
 - それはつまり、**7世紀にはもう琉球諸語と日本語が分かれ、**
 - それぞれが独自の進化を始めていたということです。
- 一方で、**琉球諸語と日本語を細かく検討すると、**
 - **稲についての言葉が共通していることもわかります。**
 - それはつまり、稲作が日本列島に伝えられた紀元前10世紀から紀元後3世紀頃の時点では分岐していなかったことを意味します。
- だから、**ふたつの言葉が分かれたのは**
 - **3~6世紀くらいだと推定できるんですね。**
 - **分岐が起こった場所は九州でしょう。**

インタビュー記事の日本語・琉球語の歴史



この移動拡散ルートは、本当にあったことなのか？

- ① 中国大陸の何処からか、琉球日本語の祖語を持った民族が、朝鮮半島へ移動した。
 - ・ これは事実か？
 - ・ 言語学の証拠は適切か？
 - ② 朝鮮半島から日本への移住があったのか？
 - ・ 朝鮮半島の歴史から見直したい。
 - ③ 九州から沖縄・琉球へ大型の民族移動はあったのか？
 - ・ 稲作を日本列島に持ち込んだ人々と同一で、
 - ・ 日本語/琉球語を話す民族は、
 - ・ 新しい農耕技術・水田稲作をもって、
 - ・ 移動し、新地帯を開発し居住・拡大を行った。
 - ・ 水田稲作技術を有力な材料とした。 これは有り得ることなのか？
 - ④ 稲作が日本列島に伝えられた紀元前10世紀から紀元後3世紀頃の時点では分岐していなかった。
 - ・ 琉球諸語と日本語を細かく検討すると、稲についての言葉が共通していることもわかります。
 - ・ この分岐していなかったことは、本当か？
- ・ 「日本語・琉球諸語による歴史比較言語学」外を読み、まずは、著者達の説を理解する。

- 歴史比較言語学 頁58-59
- ただし、7世紀以前の朝鮮半島の歴史を記録する『**三国史記**』(1145年成立)などに記された西暦757年以前の朝鮮半島の地名には、日本語と音と意味が類似した語が見つかることが知られている。
 - ここから、日本語と系統関係のある言語”が古代朝鮮半島で用いられていた可能性が古くから指摘されており、現在に至るまで研究が続けられている。
 - 『三国史記』では「A一云B」のような形で、同一の地名がAとBとで二重に表記されている。一例を挙げよう(5)。
- (5) **七重縣一云難隱別**
 - Aは意味をBは音を意味していると推測できる。
 - すなわち「七重」という意味を「難隱別」という音で表していた言語が古代朝鮮半島に存在していた。
 - 「難隱別」という漢字は*nananpietと発音されていたと再建でき(Vovin2017)、
 - これは「七重」の日琉祖語形*nanapia(上代語nanape)によく似ている。
 - このような語が、例えば「三」「五」「十」「谷」「水」「口」「兔」「鉛」など、数語見つかる。
- このような記録が日琉諸語と系統関係にある言語を反映するものであると断言するのは拙速だろう。
 - この言語はすでに消滅しており、現在の朝鮮半島には残っていない。
 - 現在用いられている諸言語に関する限り、日本語と系統関係の確立されている言語は琉球諸語と八丈語を描いて他にない。
- 以上が、日琉祖語が朝鮮半島を經由して、日本・琉球に伝播した根拠

第2章 「分岐的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」 五十嵐陽介

• 3.2. マトリョーシカ分布

- 図5はある地理的領域における仮説上の言語的形質の分布を表した言語地図である。
- 太線は当該領域の境界を、点線は等語線を表す。
 - この地図では、意味 M1 を表す形質 x と形質 a がそれぞれ図5左のように分布し、
 - 意味 M2 を表す形質 y と形質 b がそれぞれ図5中央のように分布し、
 - 意味 M3 を表す形質 z と形質 c がそれぞれ図5右のように分布している。
 - この時、形質 a の分布は形質 b の分布を完全に含み、形質 b の分布は形質 c の分布を完全に含む。
 - このような分布を示す形質に基づいて引かれた等語線1~3を1枚の言語地図に重ねると、
 - 図6のように、等語線は交差することなく、入れ子状に分布することになる。
- このタイプの分布を本稿ではマトリョーシカ分布と呼ぶ。

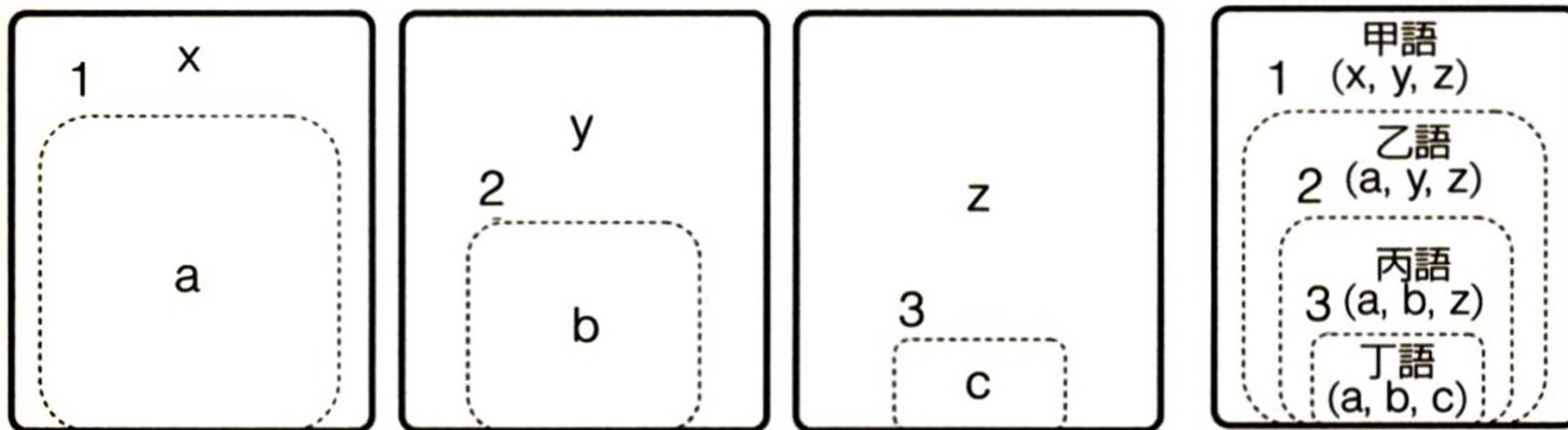


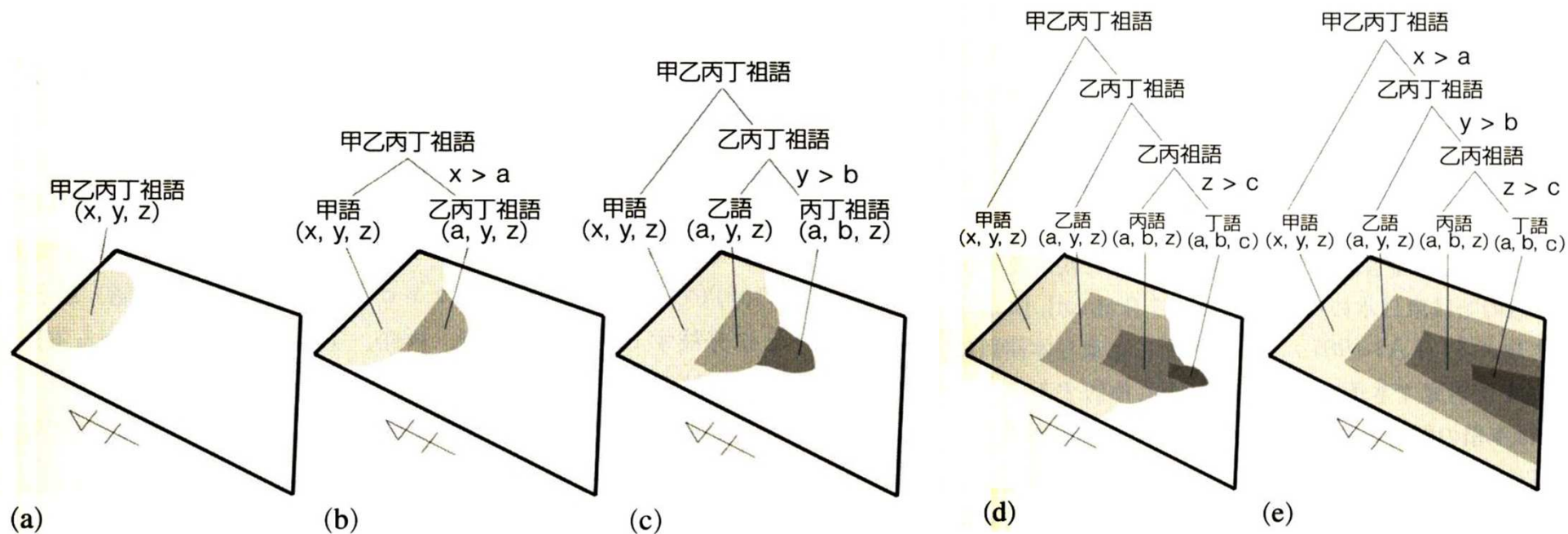
図5：マトリョーシカ分布を示す形式 a, b, c. 図6：マトリョーシカ分布

話者集団の拡散

図7:図6の4言語への系統分岐と話者集団の拡散



この記号は北を示す



拡散の順序



九州から琉球への話者集団の移動経路

S1線, S2線 ... S5線と呼ぶことにする (図9).

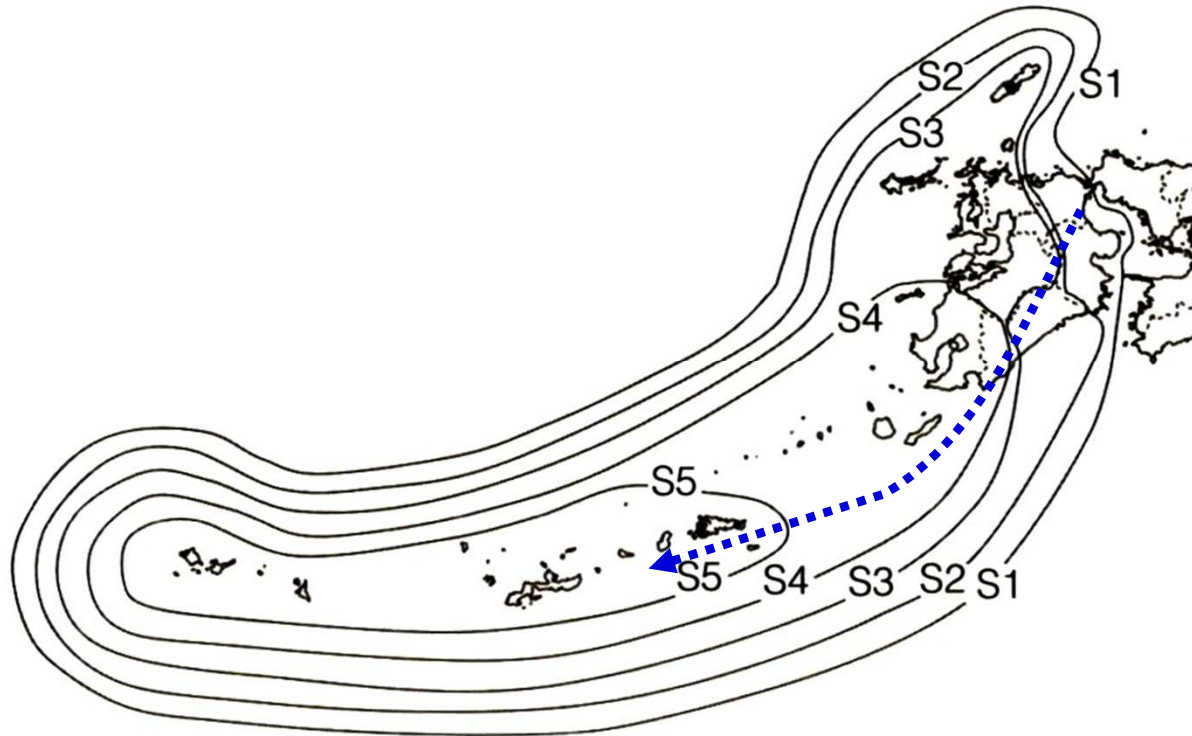


図9：南日本のマトリョーシカ分布

マトリョーシカ分布から九州から
琉球・沖縄への移動想定される。

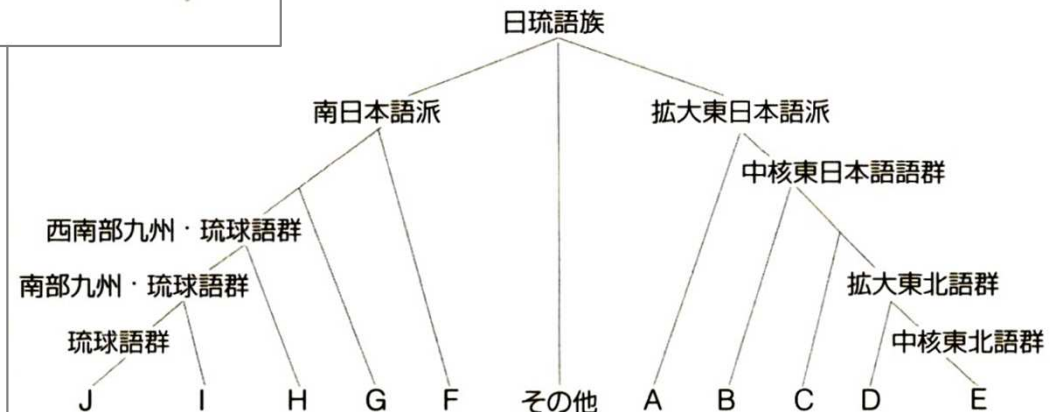


図10：マトリョーシカ分布に基づいて提案される系統樹.

移動経路と系統樹

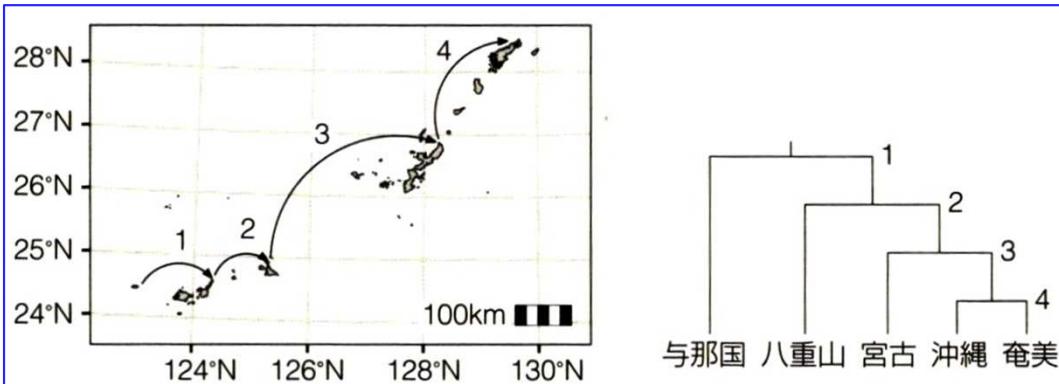


図8：「海上の道」説から予測される系統樹

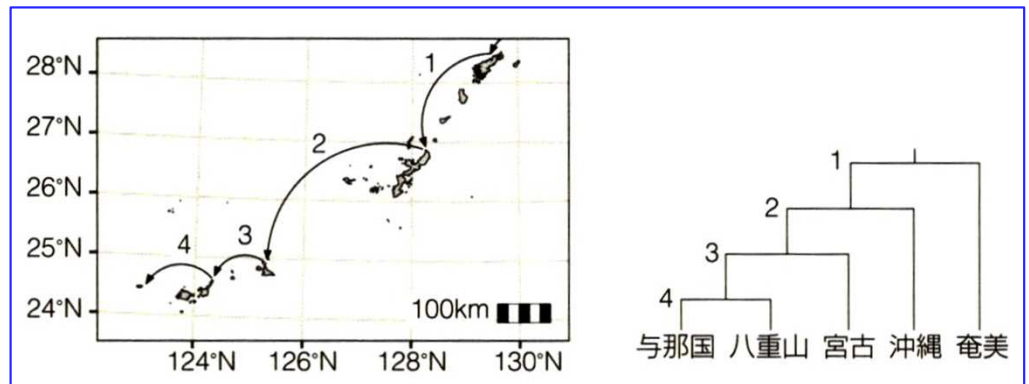


図9：単純な島伝いモデルから予測される系統樹

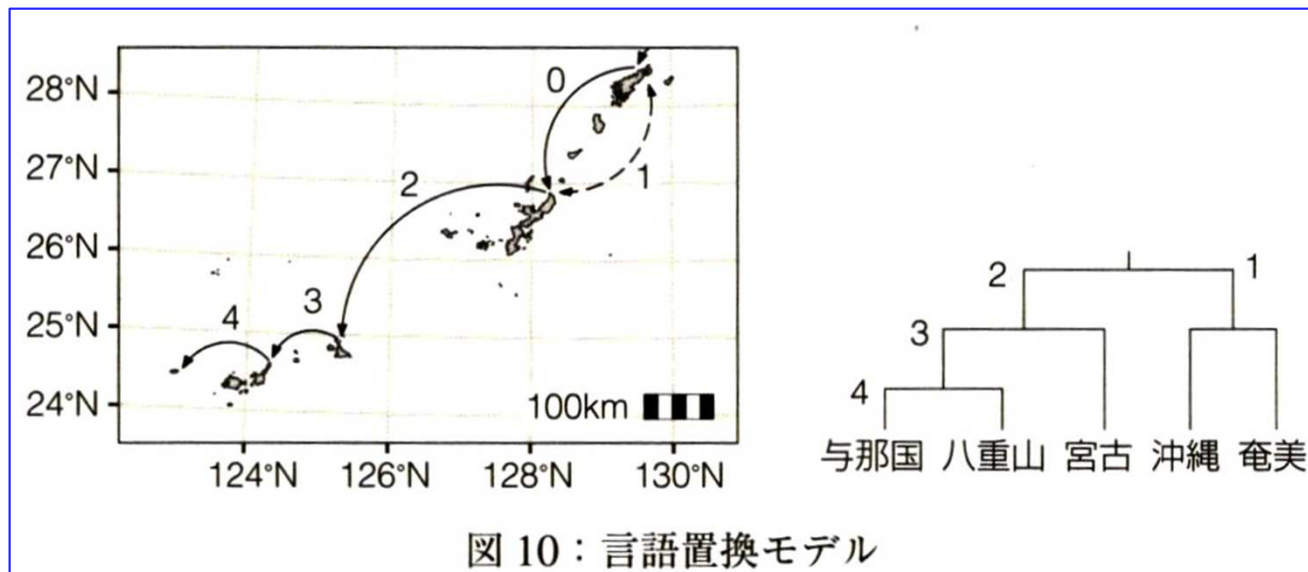


図10：言語置換モデル

- 図10の言語置換モデルが想定される。

この琉球語の話し手の移動は、現状の有力な古代史に沿っている

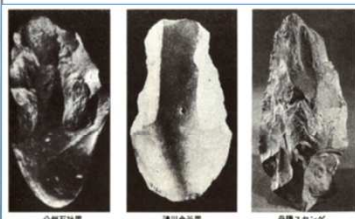
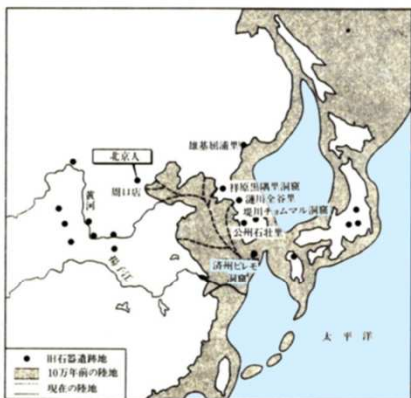
- 以上の話し手の移動モデルは、現在有力な沖縄・琉球の歴史に沿っている。
- 現在有力な沖縄・りゅうきゅうの歴史は
 - 沖縄で出土する古代人の骨は、その当時に移動してきた人骨
 - 現在、沖縄に住んで居る人達ではない。
 - 古代人は、沖縄列島では生存し切れず、死に絶えた。
 - 古代人骨にはハリス線(複数の飢餓を経験した痕)が残っており、絶滅した可能性が高い。
 - (この解釈には疑問が有る。)
- 九州南部から比較的新しい時期(10世紀前後)に南下して定住したものが主体であり、
 - それまで居住していた奄美・沖縄諸島と先島諸島の2グループの先住民に取って代わった
- 言語学および考古学からは、中世(グスク時代、11世紀~15世紀)に九州から「本土日本人」が琉球列島に移住したことが推定でき、
 - 高宮広土(鹿児島大学)は、「結果として、琉球方言の元となる言語を有した農耕民が本土から植民した。
 - 著名な『日本人二重構造論』を否定するという点で大変貴重だ」と指摘している[30][31]。
- 12世紀に源為朝(鎮西八郎)が現在の沖縄県の地に逃れ、その子が琉球王家の始祖舜天になったと言うものである。
 - その事自体の真偽は不明であり歴史学者でも探求の的となっているが、未だに全く確定的な見解は得られていない。
 - ともかくも、王国時代の琉球ではこれが正史として扱われており、この話がのちに曲亭馬琴の『椿説弓張月』を産んだ。

- 「日本語・琉球諸語による歴史比較言語学」と PR用のインタビュー記事を紹介してきたが、学術的には優れた書籍との評価があるが、古代史を解明してきた立場からすると、違和感が大きい。
 - 個人的には、トマ・ペラール氏が論文「日琉祖語の分岐年代」で、日琉祖語の分岐時代が 8 世紀以前、つまり日本の有史以前、であるという結論に至るとした解析力に感銘した記憶が強い。
 - 但し、論文の最後半の部分の歴史的考察には疑問が残った。
 - 「西遼河起源説とその撤回要請」のためにフランスから日本に来て講演を行ったことを高く評価し、皆さんに紹介してきた。
- この違和感を解消すべく、「日本語・琉球諸語による歴史比較言語学」を読み、共同著者の五十嵐陽介氏の著作する別論文を読み直した結果、**根本的な問題**があると判断いたしました。
- 歴史認識の基本的な違いが存在していることから、「古代史で解明する会」で明らかにして来た事実を、先に紹介することとします。
 - 2023年8月12日の32.「古代朝鮮と日本の歴史」を中心に、編集して紹介いたします。

まずは、韓国の歴史を教科書から学ぶ

- 2006年発行の入門韓国の歴史[新装版]—国定韓国中学校国史教科書—
- 世界の教科書シリーズ4 明石書店発行 石渡延男監訳 三橋広夫共訳

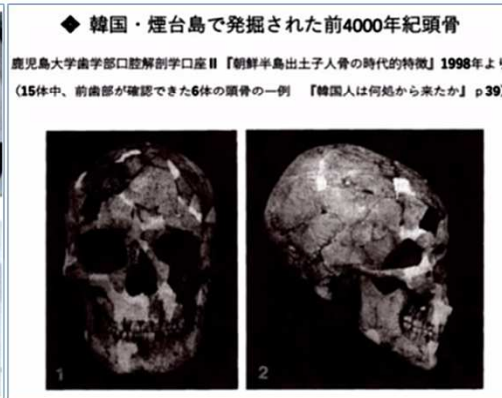
- 韓国の中学の教科書からまず学んで行く。
- 韓国の歴史は、70万年前から原人の活躍する時代から始まる。
 - 日本にも同時代の遺跡があるように地図では掲載(旧石器事件を無視)
 - 日本が10万年前は地続きとの地図を掲載。
 - (約65万年前と約43万年前に一時的に陸橋がかかった時期があったが10万年前は現在とは地形は変わらない。)→
 - 中国とは地続きのため、韓国に原人が存在した可能性はある。



旧石器時代の東アジア

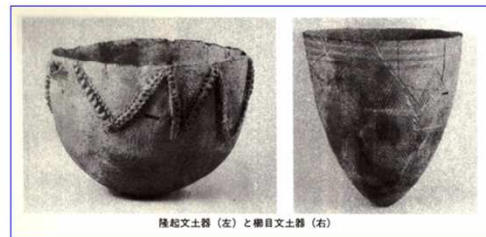
韓国の新石器時代の人々

- 韓国の紀元前6千年以降に、磨製石器と土器(無文土器と隆起文土器→櫛目文土器)を使った人々は、誰か?
 - 磨製石器・日本産黒曜石・土器(九州)・竪穴住居など、日本のものと同一
 - 九州西北縄文人のDNAは、倭人と縄文人の混血。
 - 韓国南部・加徳島の6300年前の人骨のDNAは倭人と縄文人の混血。
 - ▶ 紀元前6千年以降に、韓国に住んで居たのは、日本・九州の縄文人(倭人と混血)(西北九州縄文人)
- 韓国の国立博物館の展示も同様の表記があるので、縄文人が渡来したことは、一致した見解。
 - 現代韓国人の4%は、縄文人のY遺伝子を持つ。(Dong-Jik Shin et al 2001.)
 - 九州の縄文人が韓国に居たならば、**黒川式土器**・米を含む雑穀を畑作(焼畑)で栽培もしていた筈。
 - 黒川式土器は、韓国でも出土。



新石器時代

- 紀元前6000年前頃より磨製石器と土器を使った新石器時代がはじまった。
- 新石器時代には、いわゆる無文土器と隆起文土器を作って使用したが、後には、櫛目文土器を使うようになった。
- 竪穴住居が使われた。



隆起文土器(左)と櫛目文土器(右)



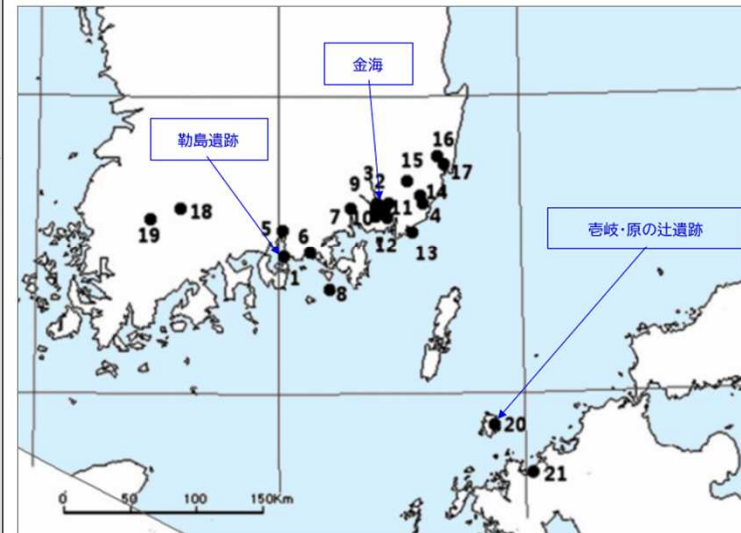
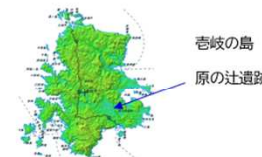
新石器時代の磨製石器



先史時代の遺跡

「朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉」石丸あゆみ著 ②

- 朝鮮半島の弥生系土器 出土地
- 時期を2段階に区分する
 - I期：城ノ越式から須玖I式古段階、
 - II期：須玖I式新段階から須玖II式
- 土器の特性：弥生土器をB類 / 弥生土器の忠実模倣品をA類



遺跡	
1	泗川勒島遺跡
2	金海龜山洞遺跡
3	金海大成洞焼成遺跡
4	釜山菜城遺跡
5	泗川芳芝里遺跡
6	固城東外洞遺跡
7	昌原茶戸里遺跡
8	統榮葛島遺跡
9	金海会観里
10	金海興洞遺跡
11	金海池内洞
12	金海北亭貝塚
13	釜山朝島貝塚
14	釜山温泉洞
15	梁山北亭洞
16	蔚山達川遺跡
17	蔚山梅谷洞遺跡
18	光州新昌洞遺跡
19	南原細田洞遺跡
20	原ノ辻遺跡
21	御床松原遺跡

朝鮮半島と日本の歴史関係

日本から西北九州縄文人が進出

初期水田
稲作到来

倭人と水田
稲作渡来

後漢へ朝献

卑弥呼-朝献

神武即位

古墳時代開始

4000	1046	1000	300	108 ←BC	AD→	100	200	313	400	500	600	700
新石器文化	周成立	青銅器文化	鉄器文化普及	古朝鮮滅ぶ				高句麗	百済発展	新羅基礎	滅亡	新羅
								楽浪郡滅亡	新羅基礎		滅亡	統一

日本から縄文人
が進出

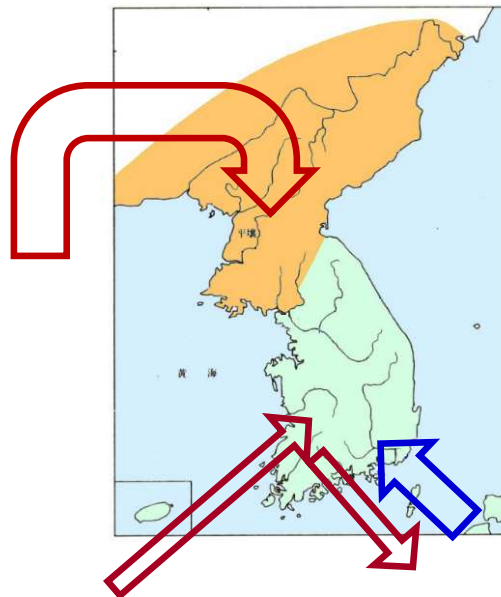
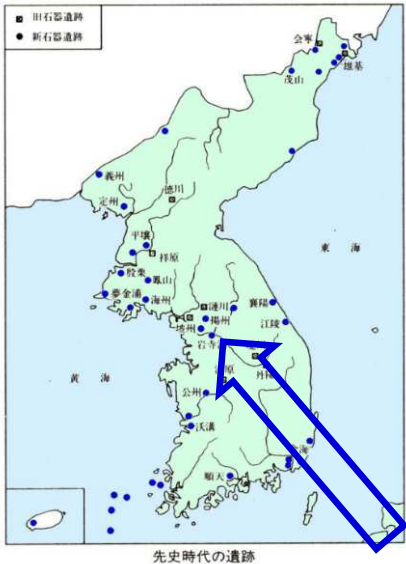
- 中国北部より中国人が
- 中国長江より中国人が
- 水田稲作が日本へ
- 日本から弥生人が

日本から倭人・弥生人
が進出

楽浪郡滅亡

百済・開始

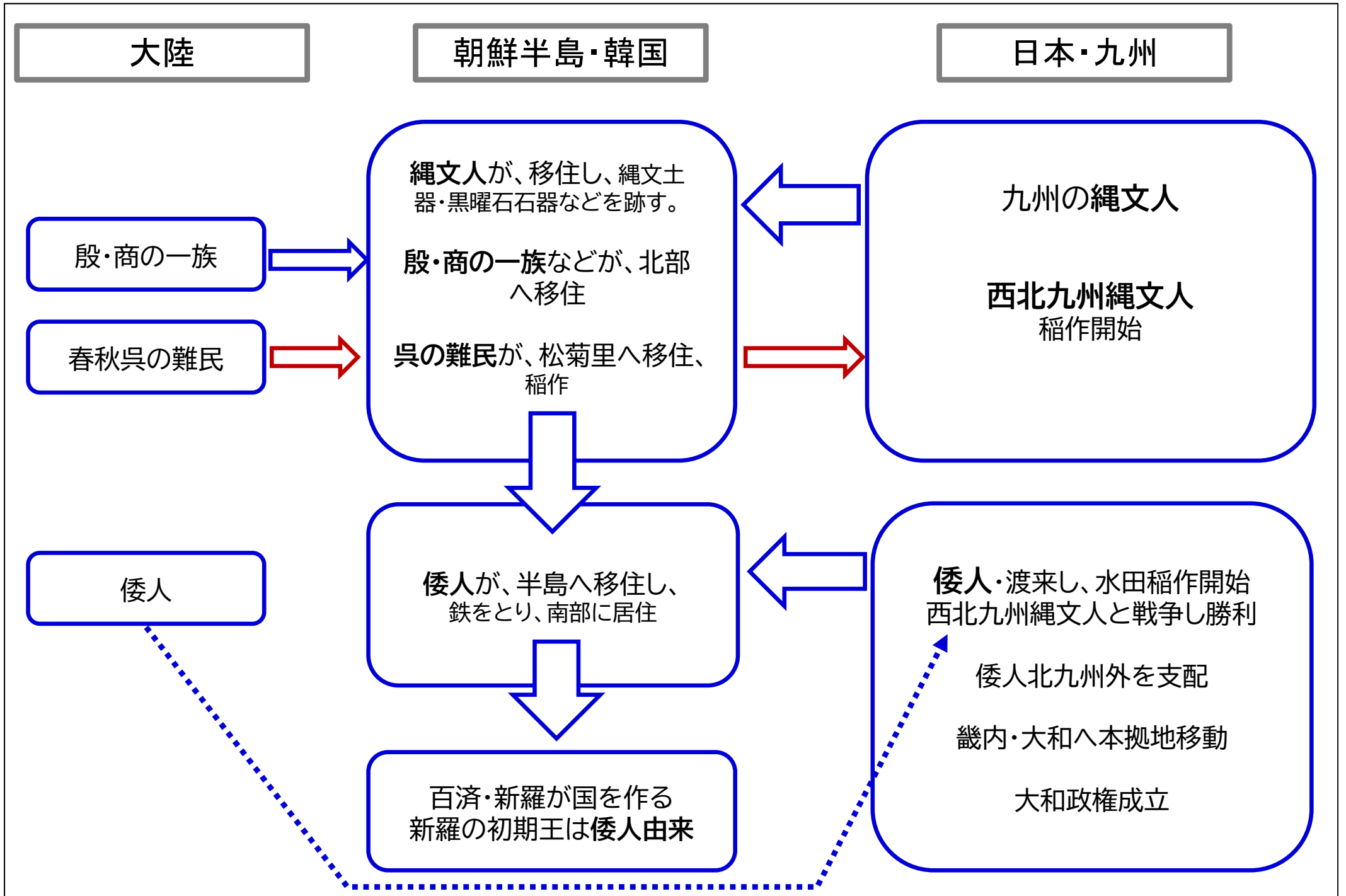
新羅・開始



- 韓国の紀元前6千年以降に、磨製石器と土器(無文土器と隆起文土器→櫛目文土器)を使った人々は、誰か？
 - 磨製石器・日本産黒曜石・土器(九州)・竪穴住居など、日本のものと同一
 - 西北九州縄文人のDNAは、倭人と縄文人の混血。
 - 韓国南部・加徳島の6300年前の人骨のDNAは、倭人と縄文人の混血。
 - 紀元前6千年以降に、韓国に住んで居たのは、日本・九州の縄文人(倭人と混血)(西北九州縄文人)
 - 韓国の国立博物館の展示も同様の表記があるので、縄文人が渡来したことは、一致した見解。
 - 現代韓国人の4%は、縄文人のY遺伝子を持つ。(Dong-Jik Shin et al 2001,)
 - 九州の縄文人が韓国に居たならば、黒川式土器・米を含む雑穀を畑作(焼畑)で栽培もしていた筈。
 - 黒川式土器は、韓国でも出土。

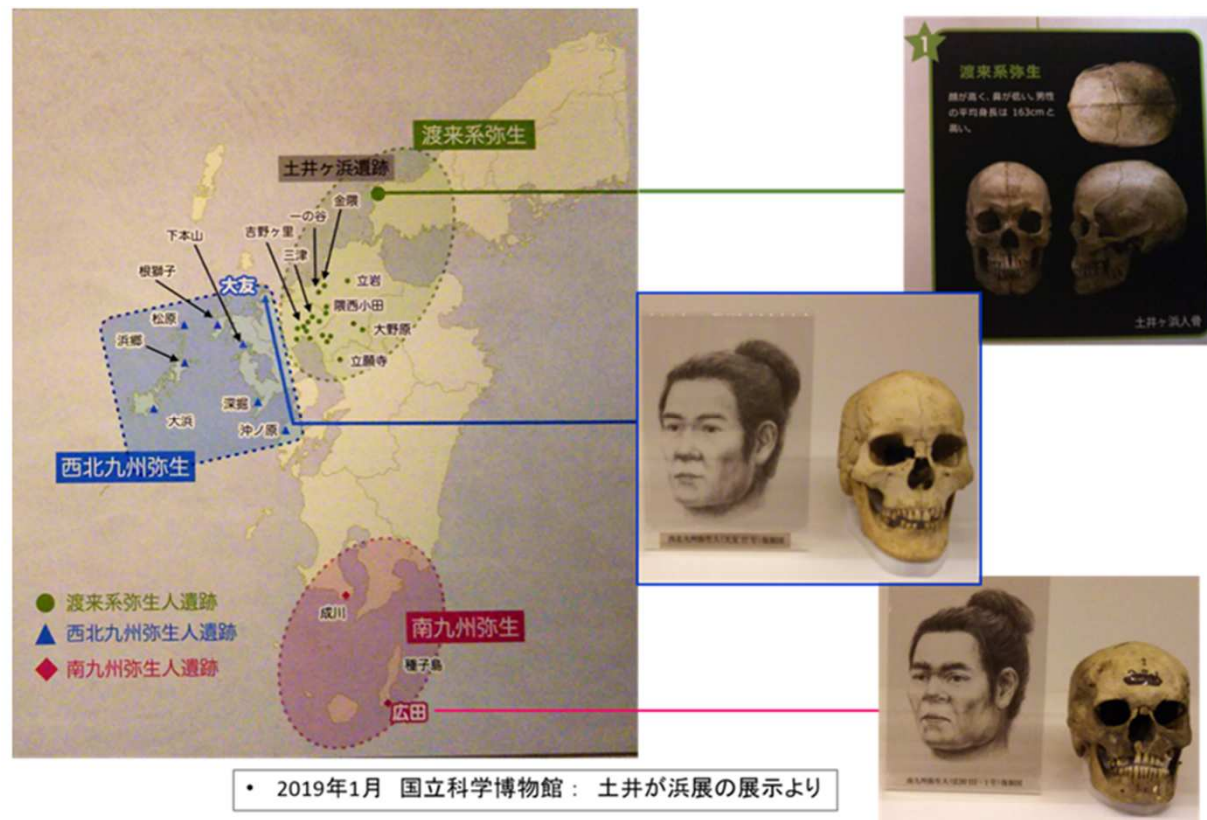
- ◆ I期(弥生前期) (弥生前期は、夜臼式/板付I式/板付II式の時代)
 - 従来の説:人や文物の主な流入の流れは、朝鮮半島から日本へ
 - 今回確認:人や文物の主な流入の流れは、朝鮮半島から一方的には無く、金海地域に、弥生土器が流入。
- ◆ II期(弥生中期) (弥生中期は、城ノ越式/須玖I/II式以降)
 - 中期初頭から前半期 : 朝鮮半島からの土器の流入は急激に鈍化。
 - 反対に、日本側からの朝鮮半島への土器の流入は本格化する。
 - 金海地域への弥生土器の流入は無くなる。
 - 靑島遺跡では、最も多くの弥生土器が流入する。
 - 靑島へ流入する土器には大型の甕は無く、中型/小型の甕。甕形状も、蓋(木製か)の使用に適したものの。
 - 運搬用具。直系35cmの大型甕は船の運搬に不適。
 - 原ノ辻遺跡出土弥生土器と様相を同じくするA類(忠実模倣品)で、原の辻から靑島へ送られた。
 - ✓ 鉄鉦山にある蔚山達川遺跡出土の壺は、須玖II式の北部九州からの搬入品。鉄器生産に直接関係する遺跡から弥生系土器が出土した意味は大きい。

朝鮮半島へは日本から移住 朝鮮半島から移住は限定



西北九州縄文人 / 倭人・弥生人

- 西北九州縄文人 と 倭人は、人の種類を表すものとして記述。
- 弥生時代に生きていた西北九州縄文人は、右図では西北弥生人と記されている。
- 西北九州縄文人は、数千年前から九州に居住し、南九州には縄文人(広田人)が居住し、北九州には西北九州縄文人が住み分けた。
 - 西北九州縄文人は、DNA分析では、縄文人と倭人が混血したものとされる。
 - いつからかは不明。
- 弥生時代開始時期には、北九州の東側：平野部では、倭人が大挙移住し、倭人が居住し、倭人と西北九州縄文人は急速に混血した。
 - 生活は、倭人のもたらした水田稲作に拠り、金属器を使用する文化に変化した。
- 弥生時代に入ってから、西北九州縄文人は、九州の西北部＝島・半島部分に多く居住し続けた。



古代韓国南岸の住人・西北九州縄文人/弥生人 DNAの謎

- 韓国の南岸・釜山市/加徳島・獐項遺跡で人骨48体出土
 - 2体のDNA解析が行われた。
 - 年代は6300年前
 - mtDNAは日本列島において弥生時代以降に見られるハプロタイプ
 - 核ゲノム解析からは、縄文人と弥生人の混血
- 2019年神澤・安達外の論文発表-『文物』第9号



藤尾.,2023図1を編集

2019年(令和元年)8月16日(金) 享月 日 新刊 展覧

「縄文人直系」→核ゲノム解析「混血」

弥生時代に現在の長崎県周辺にいた「西北九州弥生人」は、縄文人直系と考えられていたが、実は渡来系弥生人との間でかなり混血が進んでいたことを、国立科学博物館などのグループが人骨に残された遺伝情報(核ゲノム)を解析して明らかにした。日本人類学会の機関誌Anthropological Science(日本語版)に発表した。

九州の弥生人は三つに大別される。大陸から北部九州にやって来た渡来系弥生人、鹿児島県付近に住んでいた、頭の前後が極度に短いなどの特徴を持つ南九州弥生人、そして、西北九州弥生人だ。渡来系弥生人が在来の縄文人と交じり合う形で、現代の日本人につながる人々が生じていったとされるが、西北九州弥生人は影響をほとんど受けず、顔の彫りの深さや腕の太さなどに縄文人と共通する特徴を残していたと考えられてきた。

今回、下本山岩陰遺跡(長崎県佐

「西北九州弥生人」従来の説覆る可能性

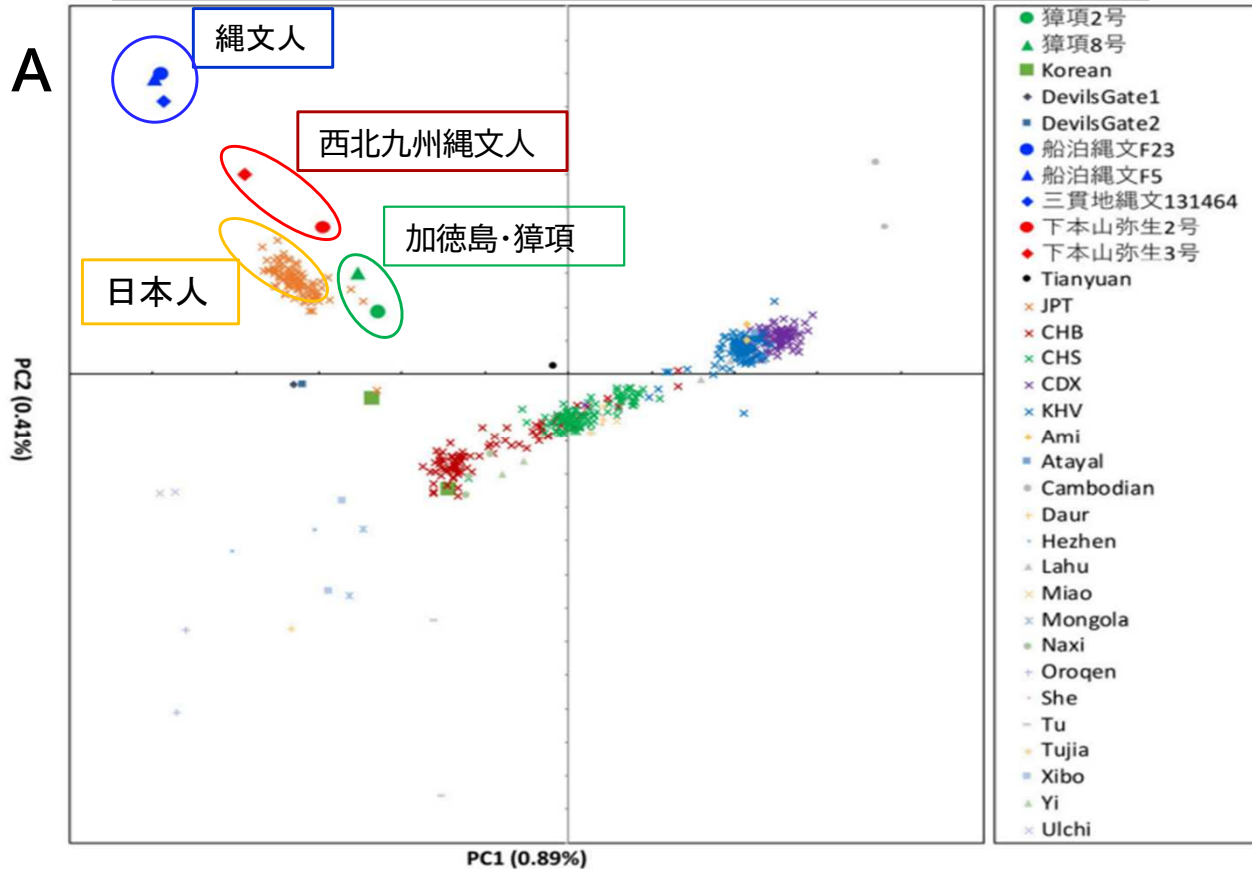
世保市)から1970年に発掘された約2千年前の西北九州弥生人の男女各1体の人骨を対象に、核ゲノムを構成するDNAの変異に注目して、遺伝的特徴を解析した。2体はともに縄文人と現代日本人との中間に位置付けられた。縄文人直系と考えられてきた西北九州弥生人も、渡来系弥生人との間で混血が進行していた可能性が高まった。

解析を進めた科博の篠田謙一・人類研究部長は「この結果をすべての西北九州弥生人に当てはめるのはまだ難しいが、対象となる古人骨を増やせば日本人が成立する過程の詳しいシナリオが分かってくるだろう」と語る。

(米山正寛)

下本山岩陰遺跡から出土した人骨の一つ。臼歯を用いてDNAを抽出した。国立科学博物館提供

ゲノム解析の結果



- 2名分の人骨を解析した全ゲノム解析の結果
- ✓ 表Aの解析結果では、アジアの外の地域の人々から、日本人・縄文人・西北九州人は離れた存在で、西北九州縄文人は、縄文人と日本人の中間に存在。
- ✓ 表Bでも、縄文人・日本人の中間に存在するが、本土日本人からやや離れた沖縄人に近い存在であることが判る。
(論文本体にはない丸地の解釈)

- ミトコンドリアDNA(母系)
下本山3号は、渡来系のミトコンドリアDNAの男性
下本山2号は、縄文系のミトコンドリアDNAの女性
- ゲノム解析では、共に、渡来系弥生人・縄文系に由来すると考えられる両方の遺伝子を持っていた。

(縄文人)

西北九州弥生人の遺伝的な特徴

—佐世保市下本山岩陰遺跡出土人骨の核ゲノム解析—
篠田 謙一*, 神澤 秀明1, 角田 恒雄2, 安達 登2
1 国立科学博物館人類研究部 2 山梨大学医学部法医学講座 (平成30年10月9日受付, 平成31年4月23日受理)

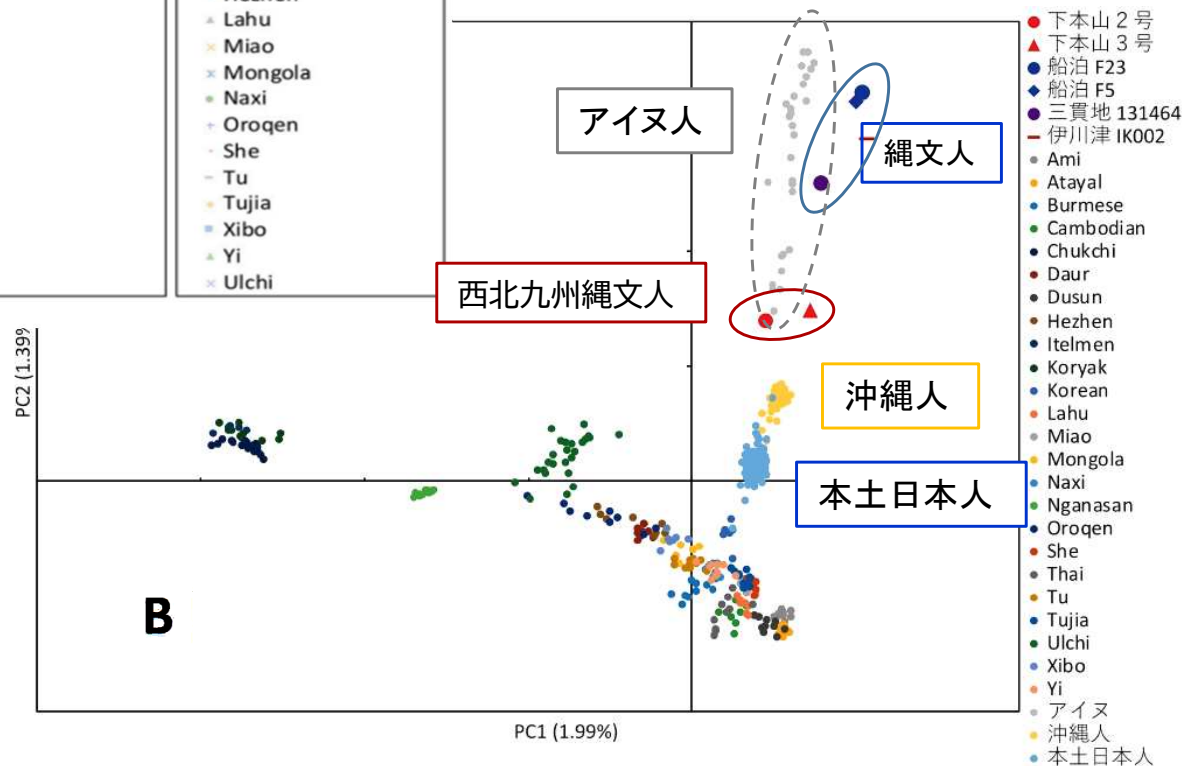


図3 主成分分析による下本山弥生人、縄文人、東アジア人の比較結果

A. 全ゲノム 5,022K SNPs を用いた結果。下本山2号・3号はそれぞれ 17,138 SNPs と 145,952 SNPs を含む。B. 131K SNPs のゲノムワイド SNP データを用いた結果。下本山2号・3号はそれぞれ 512 SNPs と 3,474 SNPs を含む。

日本から朝鮮半島へ移動した古代人

- 日本の旧石器人の遺跡分布図からは、朝鮮半島へ旧石器時代4万～1.5万年前に移住が見られる。
 - 九州の縄文人は、沖縄列島から渡来。(3万年前の始良カルデラ爆発で九州から中国四国の縄文人が壊滅的な被災を受けた。沖縄から縄文人が梶ノ原遺跡/上野原遺跡に渡来した。)
 - 国定韓国中学校国史教科書と韓国博物館説明では、紀元前6000年前頃より複数の遺跡から縄文土器を出土。九州から縄文人が韓国全土で居住していた。
 - 縄文時代末期(BC500年頃)には西北九州縄文人が、松菊里遺跡などから水田米作技術を日本に導入した。西北九州縄文人はこの時代まで、朝鮮半島で居住していたものと推定。
 - 弥生時代(BC200年～)には、城ノ越式/須玖I/II式の弥生土器が韓国南岸部に多く出土し、倭人・弥生人が朝鮮半島・韓国へ移住し、居住した。
 - 歴史年代:663年の白村江の戦い以降に、朝鮮半島から難民(百済・高句麗)が日本へ到来。
- ✓ 白村江の戦い以前は、日本から縄文人・西北九州縄文人・倭人が朝鮮半島は移住した。
- ✓ 例外は、春秋呉の難民が、西北九州縄文人に連れられ1次水田稲作の目的で到来したこと。

DNAに関する興味深いこと

- 倭人と縄文人が混血したと見られる人骨が韓国南岸の島で出土。その時期が6300年前と古いこと。
- 弥生時代初期に居た西北九州縄文人(西北九州縄文人)のDNA解析で、縄文人と倭人の混血であったことが判明。
 - ✓ 南九州の梶ノ原遺跡/上野原遺跡に来た縄文人は沖縄列島由来。
 - ✓ 鬼界カルデラ爆発(7300年前)以降に九州に到来していた西北九州縄文人はどこから到来したのか？

日本人と琉球人のDNA

Y-DNAの割合 %表示	サ ン プ ル 数	日本 列 島 特 有	シ ベ リ ヤ 北 部	日本 列 島 特 有	中 国 南 部	日本 列 島 特 有	朝 鮮 半 島 多 い	中 國 華 北 漢 族
Y-DNA →		C-M8	C-M217	D-M64.1	O-M95	O-47z	O-F2868	O-M122
日本人全体	263	2.3	3.0	38.8	0.8	25.1	8.4	16.7
アイヌ人	4		25.0	75.0				
沖縄人	45	4.4		55.6		11.1	11.1	15.6
朝鮮民族	75		9.3	4.0		2.7	33.3	40.0
漢民族(華北)	44		4.5		6.8			65.9

C1	日本列島	C1a1	C-M8	
C3	シベリヤ北部	C2	C-M217	
D1	チベット	D1a	D-Z27276	
D2	日本列島	D1b	D-M55	
O1	中国南部	O1a	O-M119	
O2a	東南アジア	O1b1a1a	O-M95	
O2b	朝鮮半島	O1b2	O-M176	O-L682
O2b1	日本列島	O-47z	O-M176	O1b2a1-47z
O3	漢族北方	O2	O-M122	

Y-DNAの名称の変遷/対応表

- 沖縄人のY-DNAを見ると、縄文人と倭人の混血と見られる。
 - 日本特有の縄文人が約60%(55.6+4.4)。
 - しかし、O-47zとO-F2368が共に11.1%と妙な数字になっています。
 - これは、古い解析方法では、この二つの分離が出来ないことが有り、半分した結果です。
 - 従って、22.2%が、どちらかになります。O-47zと考えています。
 - 華北の漢人と同じO-M122が15.6%と多いように見える。
 - 琉球王朝と明の洪武帝により、1392年、多くの学者や航海士などの職能集団が来琉したと言われる。閩(びん)人三十六姓と云われ、那覇の久米村に定住したことから久米三十六姓と呼ばれる。
 - 琉球交易により漢人が多く沖縄に到来した事情が存在したと推定。
- 沖縄人が混血した時期は不明。
 - 22.2%のO-47zの民族(日本本土に渡来した倭人と同じ民族)が、60%の多数を占める縄文人を支配し、母国語を縄文人の言語から琉球祖語に変換したことは、重視するべきと考える。
 - 西北九州縄文人は、縄文人と倭人の混血と見られる。沖縄から到来したのでは？

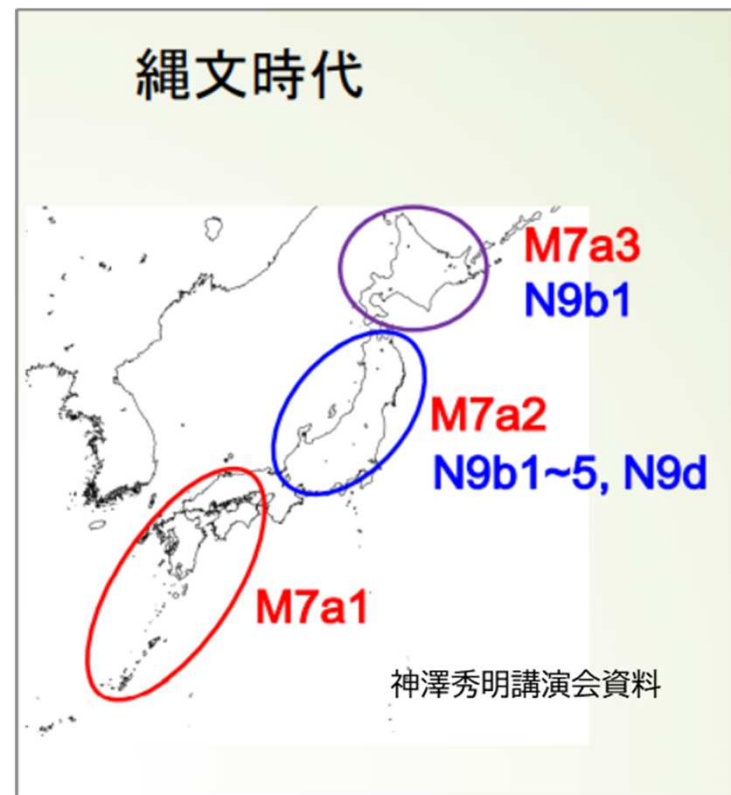
旧石器人・縄文人の分布

- 日本先住民が、スンダ大陸から4万年前に沖縄・日本へ到来。海洋民族。
 - 九州・本州の全域に磨製石斧・黒曜石石器など優れた石器を持ち、拡散した。
 - 3.5万年前から北海道へ移住し、豊富な黒曜石で優れた石器を作り、サハリン・シベリヤまで拡散した。
 - 朝鮮半島からウラジオストックまで拡散。
- 3万年前、始良カルデラ大爆発。火砕流・火山灰で九州から近畿地方付近までの地域の先住民は全滅。
 - 大爆発の6千年後(2万4千年前)、鹿児島湾に非常に近い箇所(耳取遺跡)で人が活動したことが判明。
 - その後、最寒冷期を越え、温暖化が始まり、1万7千年前から海面が急上昇が始まる。
- 始良・建昌城跡遺跡(1万3千年前)、鹿児島・梶ノ原遺跡(1万2千年前)・上野原遺跡(1万7百年前)など、南方系の特長を持ち、沖縄から移住が行われた。(梶ノ原型石斧の原産は沖縄)
- 7千3百年前、鬼界カルデラが爆発、鹿児島県の南側は壊滅。
- その後、西北九州縄文人が、黒陶・米・麦・アワ・ヒエなどを持ち、九州(主に北半分)へ移住。(沖縄から渡来と推定)
 - 朝鮮半島へも拡散。
- 2千5百年前、朝鮮半島・松菊里などに渡来していた春秋呉の難民が水田稲作を開始。(難民の数は少人数:松菊里住宅数の割合から判断)
 - その難民と水田稲作を西北九州縄文人が、北九州玄界灘沿岸へ持ち込み水田開拓を行い、東へ拡散。

縄文人のミトコンドリアDNAは、M7a型とN9b型のみ。(外は無い)
更に詳細な型で分類すると、右図のようになる。

関西・九州地方の型は沖縄と同一。

北海道へは、極く一部型の家族のみが移住。



西北九州縄文人はどんな人たちか？

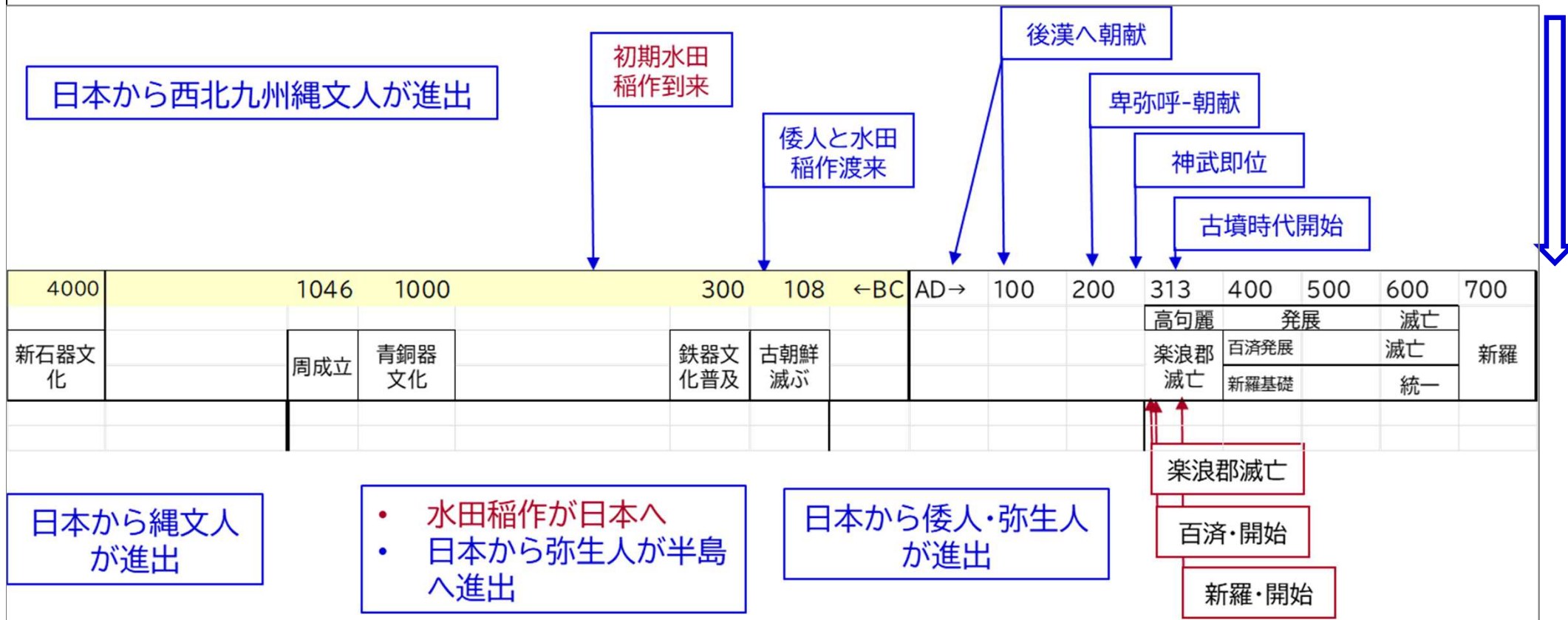
- 大友遺跡の西北九州縄文人は、弥生時代に生きていた縄文人
 - 体の形態は、正しく縄文人の体形
 - 上腕筋肉がたっぷりあり、海洋民族と見られる。
 - DNAでは、現代日本人と同様に、縄文人と弥生人の混血。

	縄文人	渡来系弥生人
顔全体	・幅が広く(横長)四角い ・彫りが深い	・上下に長い ・のっぺりしている
鼻	比較的大きい	鼻幅が細く低い
歯のサイズ	現代人より小さい	現代人より大きい
噛み合わせ	上下の歯がぶつかり合う	上の前歯が下の前歯に覆い被さる(現代人と同じ)
身長(推定平均)	男性：158cmぐらい 女性：148cmぐらい	男性：164cmぐらい 女性：150cmぐらい

- 韓国の南岸・加徳島・獐項遺跡で人骨2体のDNA解析
 - 年代は6300年前
 - mtDNAは日本列島において弥生時代以降に見られるハプロタイプ
 - 核ゲノム解析からは、縄文人と弥生人の混血
 - 2019年神澤・安達外の論文発表-『文物』第9号
 - DNA解析からは西北九州縄文人と類似
- 西北九州縄文人は、
 - 沖縄・琉球人では無かったのか？
 - 何語を話していたのか？
- 九州の縄文人＝梶ノ原遺跡の住人・上野原遺跡の住人は、火山大爆発の後に来た沖縄からの縄文人。
 - 鬼界カルデラ爆発(7300年前)後に、沖縄から来た混血した縄文人では？
 - いつ倭人が沖縄に到来していたか、これは不明。
 - 但し、韓国の加徳島遺跡の年代は6300年前を考慮するとこの時期か？
 - 日本のプラントオパール(古くは、岡山県出土)の古い物は、岡山県出土の約6000年前で同じ時期になる。

① 朝鮮半島に残る日琉祖語の痕跡は、そこが日本への拠点だったのか？

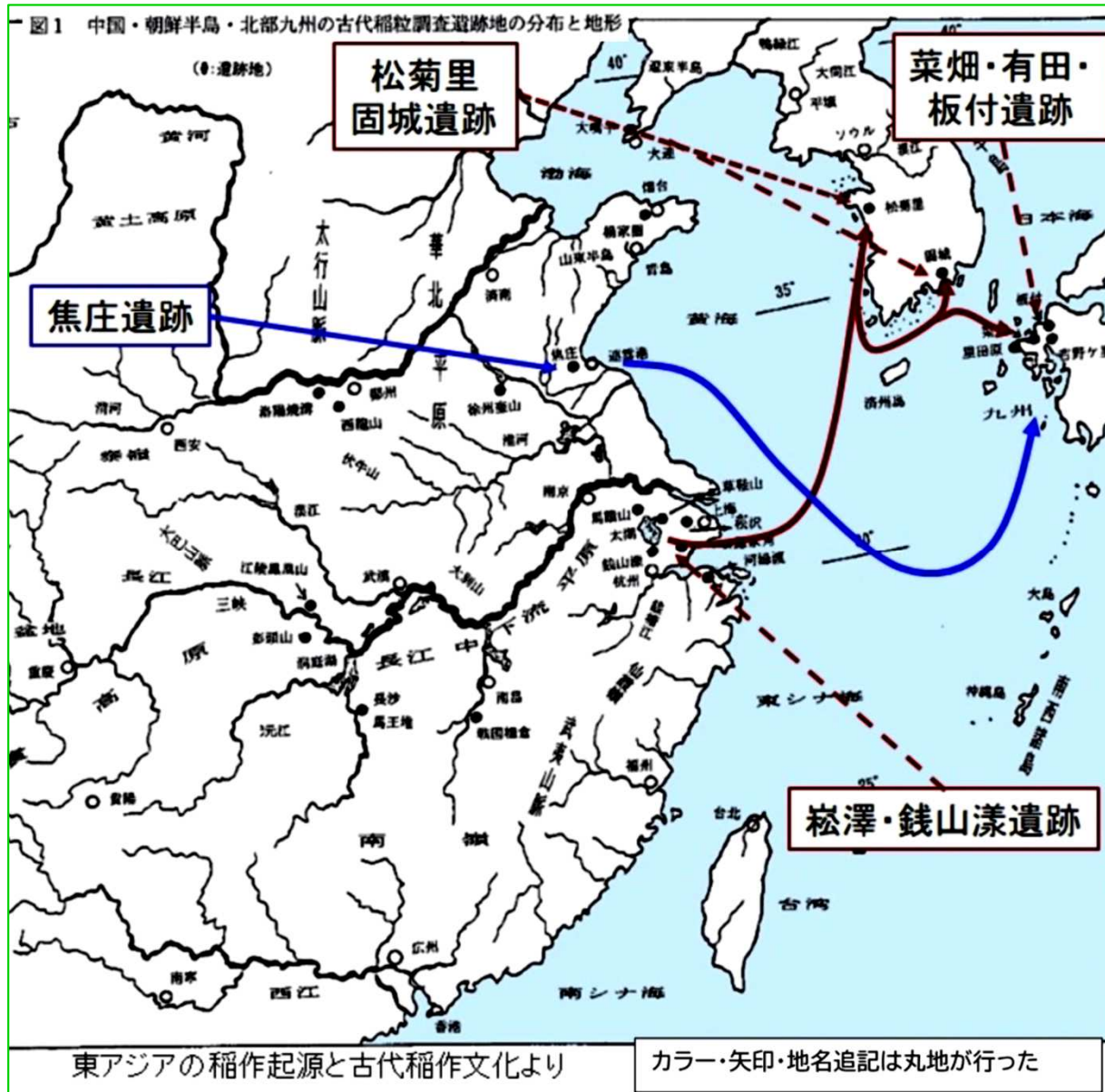
- 歴史比較言語学が根拠とする、
 - 『三国史記』(1145年成立)などに記された西暦757年以前の朝鮮半島の地名には、日本語と音と意味が類似した語が見つかること。
 - これ以前に縄文人・西北九州縄文人・倭人＝弥生人が朝鮮半島に移動している。
 - 朝鮮半島に残る日琉祖語と同じ単語が残るのは当たり前で、
 - 最初に朝鮮半島に入り、日本へ移動したとする説は、示された証拠からは言えない



② 朝鮮半島から日本への移住が有ったのか？

- 2022年3月12日 15.「弥生時代から古墳時代『水田稲作と弥生人』」で示した通り、縄文末期から弥生時代の初めには、水田稲作の渡来が、別々に、2回有った。
 - 初期水田稲作到来は西北九州縄文人が春秋呉の難民を朝鮮半島から移動させ達成したものの。
 - 日琉祖語とは無関係の事象。
 - 時期は、前ページの図にあるようにBC500年以降(春秋呉の滅亡がBC473年)
 - 2回目の水田稲作到来は、弥生渡来人・倭人が、九州を含む日本(除く沖縄・北海道)に水田稲作をもって到来したものの。
 - 先行で水田稲作を行っていた西北九州縄文人達と、土地争いからか、全面戦争になり、最終的に倭人が勝ち、2回目の水田稲作が日本全土(除く沖縄・北海道)に拡散した。
 - この水田稲作は、倭人達が朝鮮半島へ進出したため、朝鮮半島でも行われた。
 - その名残と思われる事象が存在する。
 - 大野晋氏のタミル語関連の書籍に、朝鮮半島にもある同一語として、水田を含む農業関連の用語が多くリストアップされている。
- 以上、「② 朝鮮半島から日本への移住が有ったのか？」の答えは、無かった。
 - 以下、『水田稲作と弥生人』の中から、2回の水田稲作ルートと、2回を一覧表でまとめた資料を付加する。

渡来ルート



日本の最初の水田稲作で使われた「極短小米」の源郷は、中国の長江河口域の崧澤・銭山漾の地域で

BC500年頃に朝鮮半島の松菊里遺跡に海路移動し、松菊里遺跡から日本へ移動したと見る。

移動が、陸路ならば、山東半島・遼東半島・朝鮮北部から朝鮮中部までのルートを通るはずであるが、そのルート上では「極短小米」は発見されず、別のタイプの米が発見されるため、

和佐野喜久生氏は、海路で直接、長江の下流域から、朝鮮半島中部に入ったと推測している。

朝鮮半島南部に多い碁盤式支石墓も北九州へ伝播しているが、この碁盤式支石墓は長江河口域の南の温州市から出土しており、東夷の墓制と云われる。

温州は、呉の伍子胥の出身地で、崧澤・銭山漾遺跡は、春秋時代の呉の本拠地に近い。

春秋・呉が滅んだ後に、呉の難民が韓半島に多く渡来したとの記述ある。支石墓と「極短小米」の水田稲作が同時に、朝鮮半島へ移った可能性が高い。

筑後川流域の吉野ヶ里などで出土する「やや長粒」の品種は、山東半島の付近の焦庄遺跡が源郷とすると、弥生時代前期前葉に渡来した弥生人の源郷も同じ地域と推測される。

因みに、ここに近い臨淄市から出土した多数の人骨は、土井ヶ浜遺跡から出土した弥生人の人骨に極めて近いことが調査報告されている。

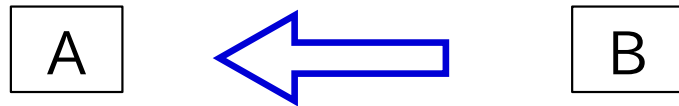
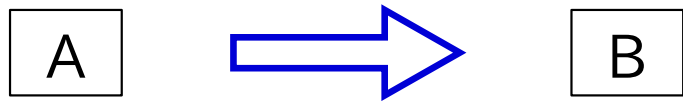
(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏が、中国各地で調査し、共同報告書を出している。)

5) 初期水田稲作民と、後から来た弥生渡来民の一覧表

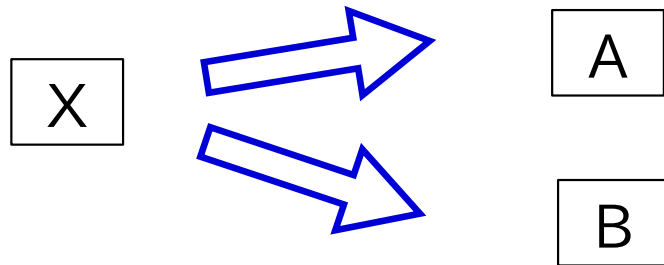
	初期水田耕作民	弥生渡来民
主要遺跡	唐津・菜畑/糸島・曲り田/博多・雀居・板付	須川・吉野ヶ里・安永田・立石・その他
土器	韓半島の松菊里・固城遺跡で出土する無紋土器 夜臼式土器	遠賀川式土器(弥生式土器) (板付式)
集落 水田 耕作地	環濠集落も一部に見られる。 中小河川又は谷間の流れを灌漑に利用した水田を構築。 米と共に海洋性食料を取っていた。 海岸沿岸又は、河口に近い河川沿いに集落を構築。	環濠(壕)住宅も見られる。 山沿いに灌漑水路を設け、自然河川に排水する 高度な灌漑技術を駆使した水田(水を抜くと乾田になる) 現在の水田と同様に、平野部、河岸段丘などを耕作地とすること可能。 海岸から離れた地域も耕作地、集落用地となった。
イネの 品種	極短小米 : 韓半島の松菊里・固城遺跡と同一種で 長江下流域(春秋呉の支配地)の松澤・銭山漾遺跡 の品種と同一	極短小米は消滅。 やや長い小粒米 : 全国に展開 韓半島には同一品種のイネはない。 山東半島付け根の地域の焦庄遺跡〔徐福村に近い〕と同一品種
住居	松菊里型住宅 (方形又は円形)もあるが 従来型の 竪穴住宅 が主体 松菊里型住宅が多い集落も一部にある。	高床式住宅 寒さ対応された床下が板材で覆われた高床式住宅 (この住宅を誤って竪穴住居として復元している)
墓制	碁盤式支石墓 : 支石の下には土壌又は木棺 韓半島南部に多い方式。 中国浙江省にも源流が見られる方式	甕棺墓 が特徴的 初期には、支石墓の下に甕棺を置くことがある 木棺墓・石棺など
武器	青銅製剣・磨製石剣・磨製矢じり	青銅製剣・矛・戈 鉄剣・矛 鉄鏃 連弩
人種	支石墓に眠る人骨は、 低顔・低身長 の縄文人 の特徴を持つ 渡来した民族は、 韓半島に逃避していた 中国難民(春秋の呉の末裔) 人数は数百人規模以内	高身長・長頭・シヨベル型前歯 (上の前歯が下の前歯に覆い被さる・現代人と同じ) 中国長江河口から山東半島までの海岸沿いの人々に類似 韓半島人にやや類似

③ 九州から沖縄・琉球へ大型の民族移動は有ったのか？

- この件に関しては、まず、陥りやすい問題解決の方法の話をする。
- 設問！ A地点と B地点に、類似した物(又は人)が居た場合、経路はどうなるのか？



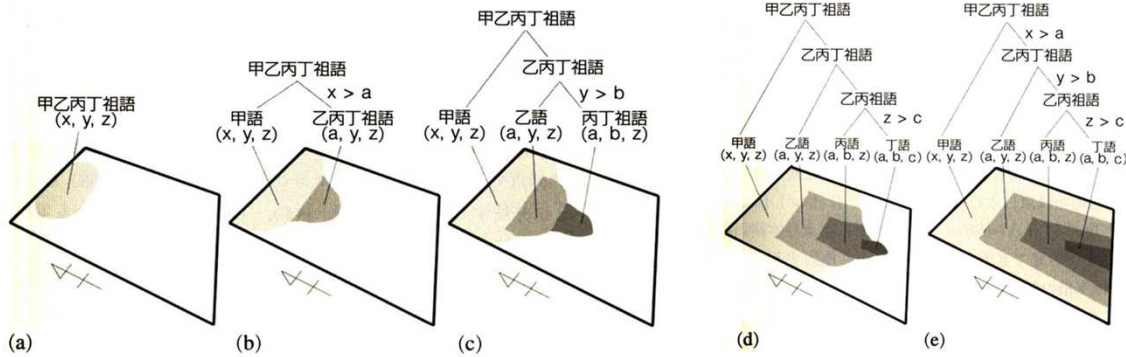
- この議論に熱中するが、次の議論を忘れることが多い。今回も同様か。



- X点からA,Bへ移動するケースが有りうる。

図7: 図6の4言語への系統分岐と話者集団の拡散

↑
この記号は北を示す



拡散の順序

- 図7の拡散図は
 - 人に移動・文化の移動では、中心から外部に拡散する。
 - 外部から内部に拡散し、しかも元のが外部に主要痕跡が残らないことは有り得ない。
 - 中心部S5から拡散することが、歴史的解釈。
- 図9の拡散図は沖縄本島と宮古島から拡散したこの解釈ならば、図9を理解できる。
- この拡散図は、西北九州縄文人が沖縄から拡散したことを示している。

言語の専門家の説に門外漢が異論をはさむ。

- 言語は人々の生活・社会の動きを反映し、変化する。
- 言葉を話す人の移動は言語の移動に連なる。
- 人と文化の移動を考慮した時に、この話者集団の拡散は、納得のいく理論なのか？

S1線, S2線 ... S5線と呼ぶことにする (図9).

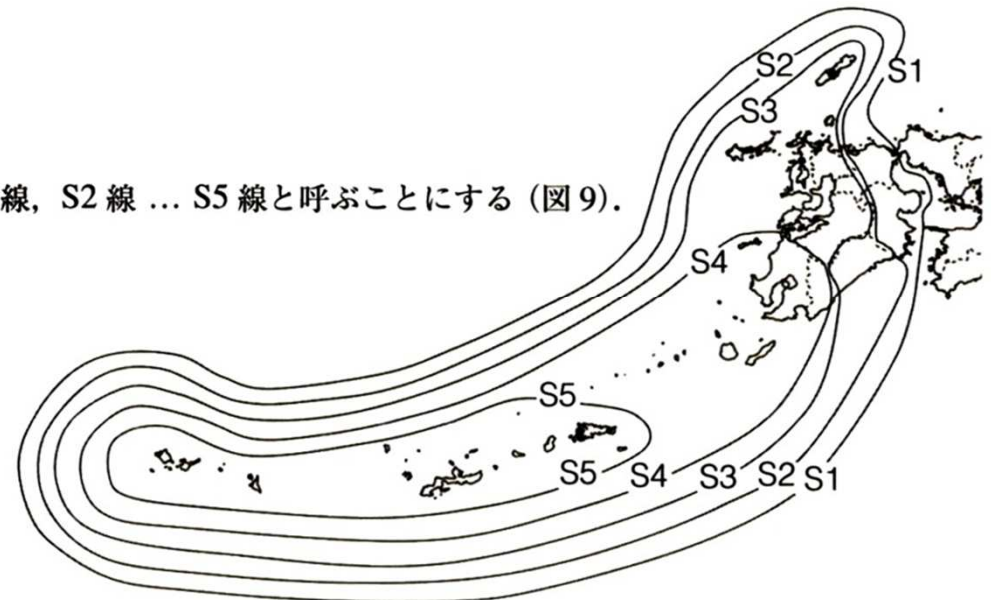
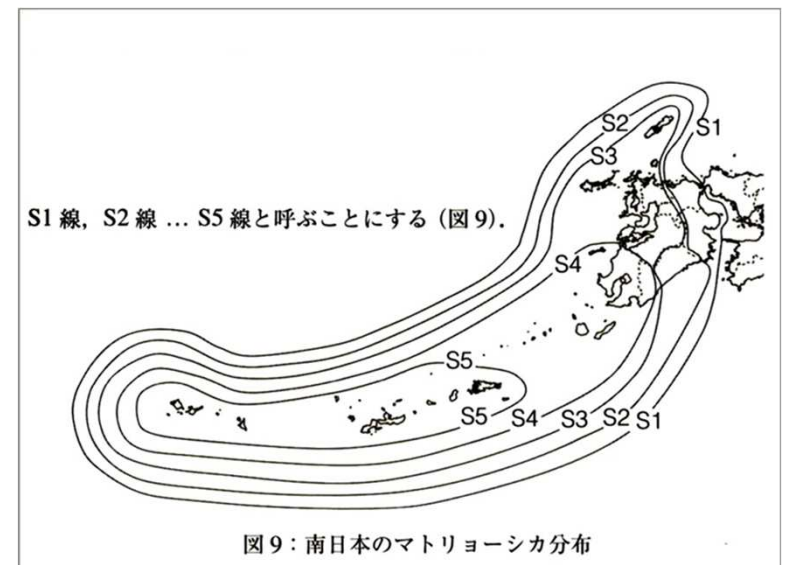


図9: 南日本のマトリョーシカ分布

③ 九州から沖縄・琉球へ大型の民族移動は有ったのか？

- 次の頁以降に示すように、
- 日本本土側に水田稲作が到来した時期は、BC3世紀～2世紀の時期で、沖縄・琉球に水田稲作が到来した時期は早くて、10世紀以降。現実的には、島津藩が琉球支配をした時期以降に、本格的な水田稲作が行われたと推定する。
- 五十嵐陽介氏の理論が正しいとしても、800年から1000年以上のギャップがあり、九州から水田稲作技術を持った日琉祖語関連の人が移動したことは無い。あったとしても、「インタビュー記事」の内容と矛盾する。
- 従って、A→B、B→Aのパターンの回答は有り得ない。X→A、X→Bを検討せざる得ない。
 - X→A、X→Bの時期は、同一時期とは限らない処が、難しい所。
- 中国大陸のある個所に居た倭人が何らかの目的で、沖縄・琉球に到来し、琉球列島を支配したとすると、図9の分布図は、極めて納得の行くものになる。



- 縄文時代末期から弥生時代初期の日本本土の状況
 1. 縄文海進(7千~6千年前)に日本本土では、貝塚が多く見られ、縄文人の人口が最も多くなった時期。
 2. その後、海退・寒冷化が進み、縄文人の人口は減少したと云われる。
堅果植物(ドングリ・シイ・栗)の栽培と狩猟の生活パターンの変化は見られなかった。
 3. 九州地方では、焼き畑農業が開始され、熱帯ジャポニカ米、ヒエ・アワ・豆・などが栽培された。
 4. 水田稲作が渡来した時期には、縄文人の人口は減少した時期で、従来活用されていなかった低湿地帯での水田耕作は大きな抵抗を受けずに開拓が行われ推進され、水田耕作民が人口を増加させることができた。
 5. 弥生人(倭人)が到来し、水田稲作を持ち込んだ。先行していた西北九州縄文人との土地争いから戦争に発展し、弥生人(倭人)が勝ち、米の品種・耕作法も一本化し、日本全土(沖縄・北海道を除く)へ普及した。

- 沖縄・琉球では、水田稲作・農業生産は、どのように取り入れられたのだろうか。
 1. 沖縄は誰も承知している列島で、黒潮が列島の北側を流れ、亜熱帯の気候。
 - 水田地帯のような景観を示す島/地域もあるが、ごく一部で例外。
 - サンゴ礁地域にあり、水はけが良すぎ、河川は短く、水量の変動が大きく水田耕作には不向きで、水田は少ない。耕作地は、畑作用。
 2. 縄文海進が、本土のように、特に大きな影響を与えて記録は無い。縄文海進以降も同様。

琉球・沖縄では、

3. 縄文末期には、広く認められていないが、縄文後期には内陸の崖下、晩期になると丘陵地帯あるいは台地上の開けた場所で遺跡が形成された。
 - 遺跡立地が農耕を想定できる点に加え、出土する遺物が石皿等の植物食加工に利用されたと思われる遺物が急増する。
 - 内陸食糧資源を堅果類等の野性植物ではなく、焼畑農耕と結論される。
 - 理由は縄文後期遺跡から出土する多量のヤマタニシである。
 - その存在は、開けた環境＝焼き畑であったことを示す。
 - 焼畑の生産作物は不明。
4. 「貝の道」に代表される九州の弥生社会との交流が発生する。
 - 沖縄のゴホウラやイモガイが本土弥生人のステイタス・シンボルになり需要に応えるため、これら貝類を貯蔵した遺構が存在した。
 - 鉄器・銅鏡・弥生土器・蛤刃石斧など弥生農耕に特徴的な石器も九州から入手した。
 - ✓ しかし、稲作農耕の存在を示すものは発見されていない。
5. グスク時代以前の遺跡から農耕を示唆する遺物・遺構は検出されてはいるものの、その存在を積極的に支持する資料はいまだに検出されていない。
 - グスク時代は、12世紀～15世紀と云われる。(範囲は、前/後共に世紀の差が存在する。)
 - 那崎原遺跡は、時期的には弥生・平安並行期の後半で、八世紀～一〇世紀が妥当の遺跡。
 - そこで、初めて、植物遺体を検出した。
 - イネ 2粒、コムギ1粒と二片、オオムギ3破片、及びアワの穎のみ。
 - 『朝鮮王朝実録』に記録されているものが遺物として、初めて検出された。

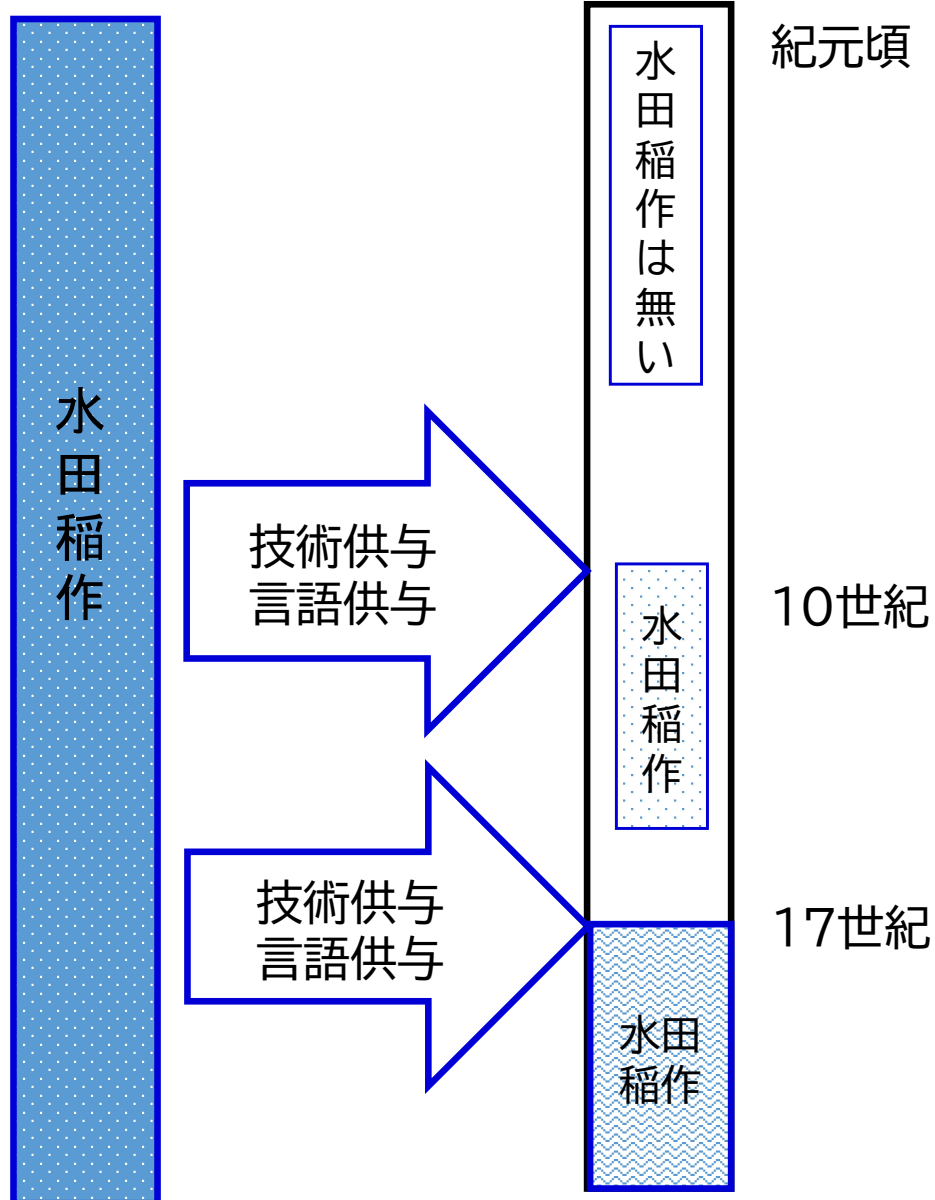
古代の沖縄では、水田稲作は主要な技術では無かった。

- ✓ 以上は、高宮広土氏の「沖縄諸島における農業の起源 -沖縄本島を中心として-」より抜粋を含む。

④ 稲作が日本列島に伝えられた紀元前10世紀から紀元後3世紀頃の時点では分岐していなかった。

日本本土

琉球・沖縄



- 琉球・沖縄では、日本本土に水田稲作が到来した時期には、水田稲作は行われていなかった。
 - 従って、沖縄・琉球には、水田稲作に係る言葉は使われて居なかった。
 - 必要なく使われない言葉は、千年以上記憶・保存されるのか？ それは、無理と考える。
- グスク時代に水田稲作が始まったとの説が有る。その時の技術・言葉は本土から持ち込まれた筈。
- その後、島津藩の琉球支配の時に水田稲作が行われたかも知れない。明治時代以降かも。
- いずれにしても、本土から技術・言葉が伝達。
 - **沖縄の水田稲作の言葉は、本土の水田稲作開始時期のものではない。**
- 稲についての言葉が共通する理由は、以上が原因で、分岐とは無関係。

- ① 中国大陸からか、琉球日本語の祖語を持った民族が、朝鮮半島へ移動した。 -----間違い
- ② 朝鮮半島から日本への移住が有ったのか？ -----間違い
- ③ 九州から沖縄・琉球へ大型の民族移動は有ったのか？ -----間違い
- ④ 稲作が日本列島に伝えられた紀元前10世紀から紀元後3世紀頃の時点では分岐していなかった。
-----間違い

✓ 今回のインタビュー記事の発言は、この4点に関しては間違いが確認された。

- 2012年 トマ・ペラル氏が発言した中で、「日琉祖語の分岐年代」を発表した中で、「日琉祖語の分岐時代が8世紀以前、つまり日本の有史以前、であるという結論に至る。」とした。
 - 今となると、分岐という言葉が気になるが、8世紀以前が、二つの言語に違いが存在したことが論証できたことは信頼できる事実。 ←丸地コメント
- 先程の検討方式に戻るが、
 - A→B、B→Aのパターンは有り得ない。
 - X→A、X→Bを検討せざる得ない。
 - 解決の重要な鍵をにぎる件は、西北九州縄文人の問題：新情報
 - DNA解析で、西北九州縄文人が、縄文人と倭人の混血と判明したこと。
 - 同様に、半島半部の加徳島の6300年前の人骨が、縄文人と倭人の混血と判明したこと。
 - 沖縄人のDNAは、縄文人と倭人の混血。
- ✓ 従って、2021年7月の「沖縄の古代歴史の真実は？」を見直し、再検討を加えたい。

$X \rightarrow A$ 、 $X \rightarrow B$ 検討すべき位置関係

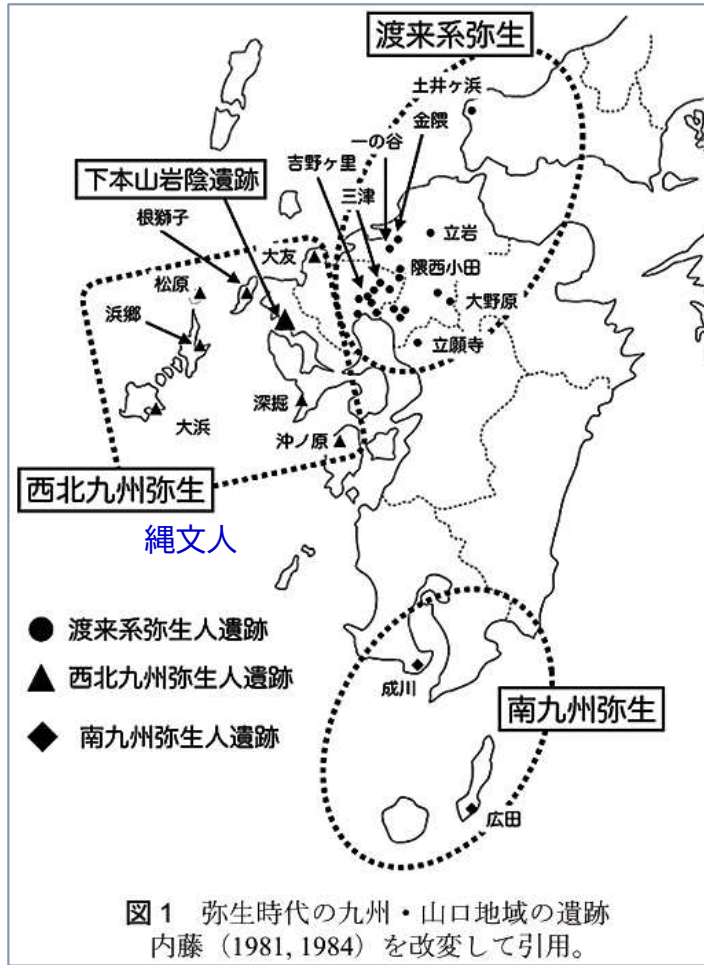


図1 弥生時代の九州・山口地域の遺跡
内藤 (1981, 1984) を改変して引用。

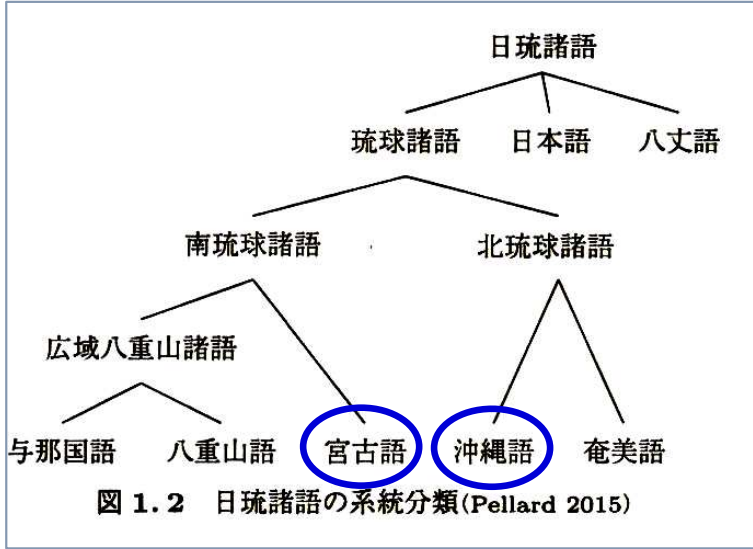


図 1.2 日琉諸語の系統分類(Pellard 2015)

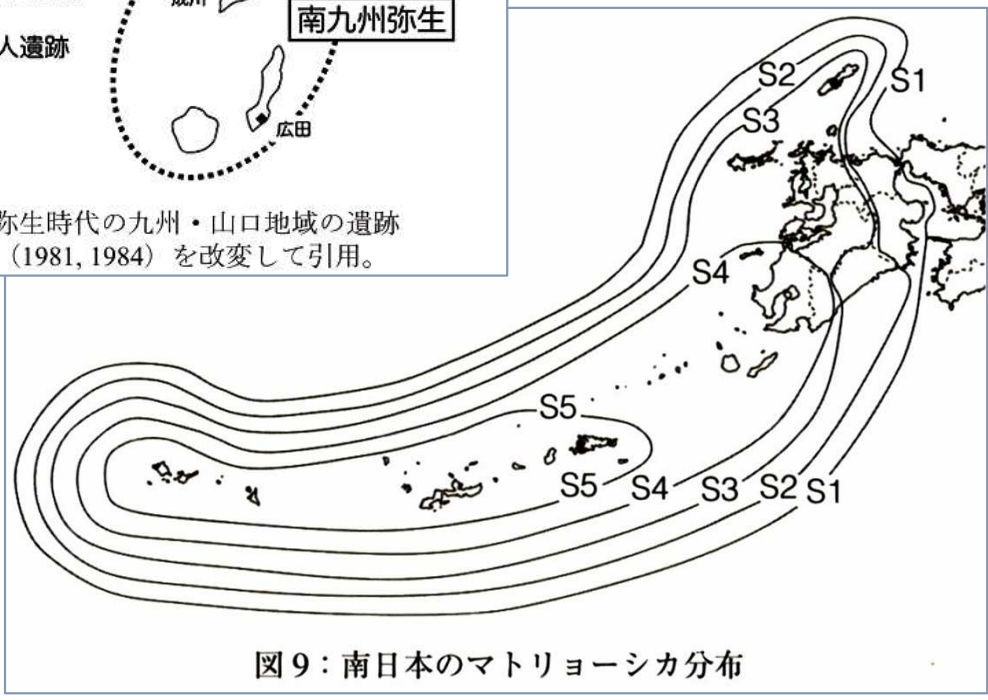


図9：南日本のマトリョーシカ分布

- 琉球諸語では、沖縄語と宮古語の二つが中心的な言語
- 宮古島は、特異点が多い。
 - この件に関しては、2021年7月/第8回日本人の起源(沖縄の古代歴史の真実は?)の資料を参考に!
 - 宮古島は、琉球祖語の調査のメッカ。古い言葉・風俗・習慣が温存される島。
 - Y-DNAでは、倭人と見られるO-47z/O-F2868が94%で、縄文系が6%と住民は、ほぼ、倭人だけ。
 - 白血病のATLウイルス・キャリアでは、宮古島だけが極端に少ない。
 - 血液型遺伝子(GM遺伝子)では、北海道のアイヌとほぼ同じレベルの古い民族であることを示す。
 - 倭人の血が多いと、ATLウイルス・キャリアは無い。
 - 血液型遺伝子(GM遺伝子)がアイルと同じレベルということは、調査した松本博士は、極端に古い/混血レベルの低い民族と推測。従って、宮古島の倭人達は、極端に古い時代に移住して来た倭人と見られる。
 - 紀元前数世期に移住して来た倭人は、上記の範疇ではない。
 - 以上のことから、宮古島は、沖縄諸島の中でも特異な島であることが判る。沖縄諸島全体では、倭人と縄文人の混血だが、縄文人の割合が65%だが、宮古島だけが、倭人94%と極端に多い。沖縄へ進出してきた倭人達が、特別なことを行い、他者を排除して秘密を守る必要があったようなことがあった筈。
- 沖縄諸島への倭人の移住
 - 先住民である縄文人は沖縄諸島では日琉祖語とは別系統の言語を使用していた筈。
 - 宮古島の血液型遺伝子の検査から見ると、倭人は、「極端に古い時代に」、中国本土から移住し、先住の縄文人と混血し、縄文人が65%と優位な混血ではあるが、母国語が倭人の日琉祖語に置き換わったと云う、稀有な条件の移住を行った。
 - 沖縄人がそれまでに開発してきた技術: 楡ノ原石斧で製作した高性能の丸木舟(サバニ)とそれを使った海洋交易(日本の北海道から日本海岸・九州との交易)は継続した。

Y-DNA

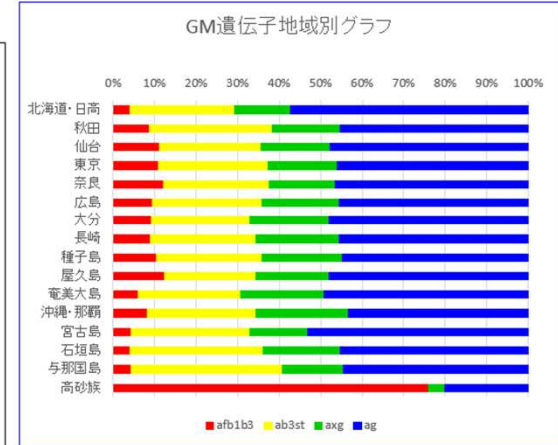
Y遺伝子 簡易表 日本・アジア
2014年10月Wikipediaより 抜粋・変換(100%換算)

		C		DE			NO						
		C1	C3	D1	D2	D3	N	O1	O2a	O2b1	O2b-	O3	
日本(野中、水口)	日本	2	3	-	40	-	1	3	1	26	8	16	100
日本(Tajima et al.)	アイヌ	-	13	-	87	-	-	-	-	-	-	-	100
日本(Shinka et al.)	沖繩本島	4	-	-	65	-	-	-	-	14	-	17	100
	南沖繩	-	-	-	6	-	-	-	-	94	-	-	100
韓国(Shin et al.)	韓国	-	10	-	-	-	4	4	-	-	32	49	100
東アジア北部(Karafet et al.)	朝鮮	-	13	-	-	-	-	3	-	-	41	43	100
	漢民族(華北)	-	7	-	-	-	-	-	3	-	-	90	100
	チベット	-	4	19	-	39	-	-	-	-	-	39	100
東アジア南部	漢民族(華南)	-	6	-	-	-	-	18	36	-	-	40	100
	漢民族(台湾)	-	-	-	-	-	-	14	9	-	-	77	100
東南アジア(Karafet et al.)	台湾	-	1	-	-	-	-	90	-	-	-	9	100
	イ	-	-	28	-	-	-	-	-	16	-	57	100
	ミャオ	-	4	7	-	-	-	7	11	-	-	71	100
	ヤオ	-	-	3	-	-	-	3	5	-	-	88	100
	タイ	-	-	-	-	-	-	-	89	11	-	-	100
	ベトナム	-	4	3	-	-	-	6	35	13	-	39	100
	マレー	-	13	4	-	-	-	11	34	-	-	38	100
	ジャワ	-	-	-	-	-	-	35	65	-	-	-	100
			-	-	-	-	-	29	71	-	-	-	100

- 男だけに伝わる遺伝子「Y-DNA」を見ると、
 - D2がアイヌ・沖縄に多く、日本先住民＝旧石器人＝縄文人の遺伝子
 - NO系統が渡来系の人々のもので、特にO2b1は弥生渡来系の主軸の遺伝子
 - O2b1が、倭人の系統と推測される
 - O3が、中国漢民族の系統で、渡来時に含まれていたものと推定
 - O2b1・O2b、O2bに関して、調査時期が古い場合には、詳細な分析が伴わず、O2b1は、O2bと分離して検出できていない。沖縄と南沖縄の項目に関しては、古い調査で、分離されていない。
 - 沖縄本島では、D2の先住民の系統が大多数で、O2bの倭人と、O3の漢人がやや多い
 - 南沖縄(宮古島を含む先島諸島)では、O2bの倭人が大多数で、極少数の先住民がいる。
- 宮古島を含む南沖縄は、日本全体とは異なった、Y-DNAの構成を持つことが注目される。

血液型遺伝子(Gm遺伝子)の示す宮古島の特異性

- 大阪医科大学学長・松本秀雄著「日本人は何処からきたか 血液型遺伝子から解く」NHKブックスの記述より
 - Gm遺伝子の研究を行なった松本秀雄博士の「色分けした円グラフ」のデータを思い出して欲しい。
 - 左記の表は円グラフを横棒グラフにしたもの。
- 赤で示したafb1b3に注目
- 宮古・石垣・世那国では、赤が非常に少ない。
- 松本氏は、先島諸島の人々の血液を調べ、この人々は、アイヌと同じ古い・純粋な民族であると、上記の著書で、記した。
- 先島諸島では、古くからの純粋な民族が住み続けてきたことを示している。



Y-DNAとGm遺伝子の両方を見ると、

- 沖縄の宮古島には、古い・純粋な倭人＝弥生渡来人の主要な民族のDNAが残されている。
- 日本本土とは、別個に考慮されるべき特異性といえる。

ATLウイルス(白血病)

- このウイルスのキャリア(感染経験者)は
 - 沖縄(琉球人)で**33.9%**、
 - 北海道のアイヌで**45.2%**で多く見られ、
 - 九州が**7.8%**とやや多く、
 - 四国一本州では1%未満のところが多く、
 - 東北では1%となっている。
 - その外に、九州の宮崎県・鹿児島県・長崎県の離島海岸地域、四国・隠岐・紀伊半島南端・東北の飛島・牡鹿半島・山陸海岸などの僻地に多く発見された。
 - 日沼氏は、現地調査を行い、
 - 非常に古くから居住し、人の混血の機会の少なかった離島や半島先端などと沖縄・九州・北海道に、キャリアが発生していることから、日本の先住民がこのキャリアを持ち、その後、日本に、移り住んだ人が混血すると、キャリアにはならないことを示した。
 - 日本先住民の純粋な子孫のみが、罹る
 - 沖縄のうち宮古島の人たちだけは、ATLウイルス・キャリアが極端に少ない。これは、宮古島人は沖縄の外の島と違って、日本先住民ではないからであろう。
- 新ウイルス物語：日本人の起源を探る 日沼頼夫著

第三章 ATLウイルスのあらまし

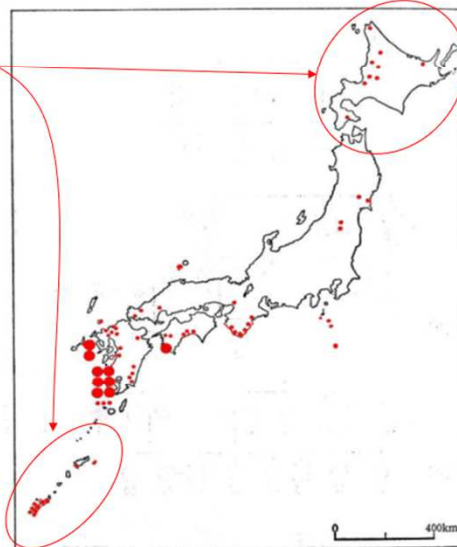


図12 ATLウイルス抗体陽性のATL患者の日本国内分布(1982年調査)。大きい丸は10例、小さい丸は1例。

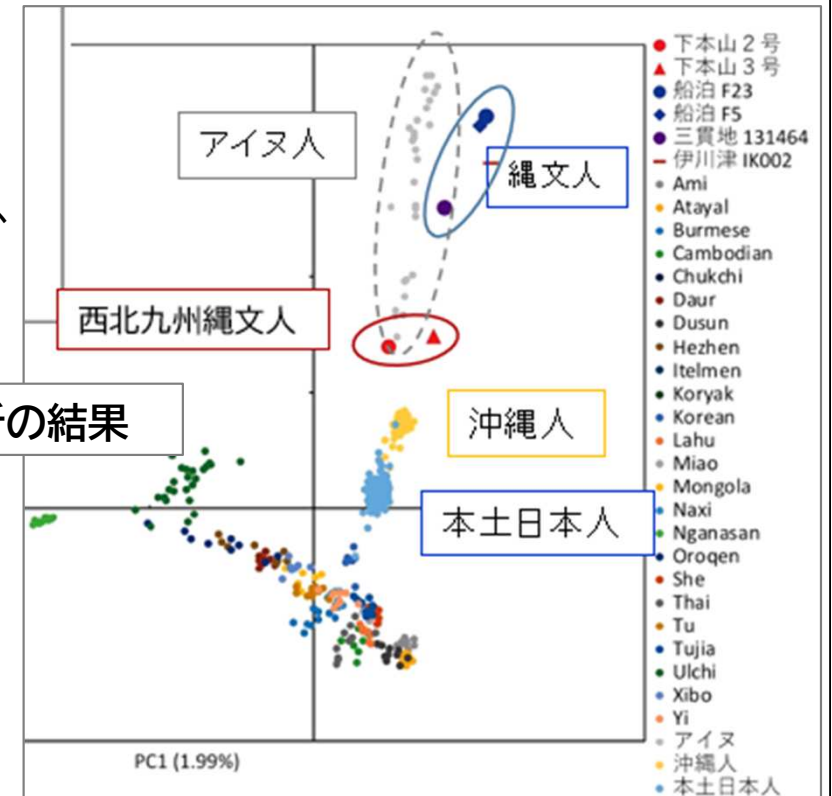
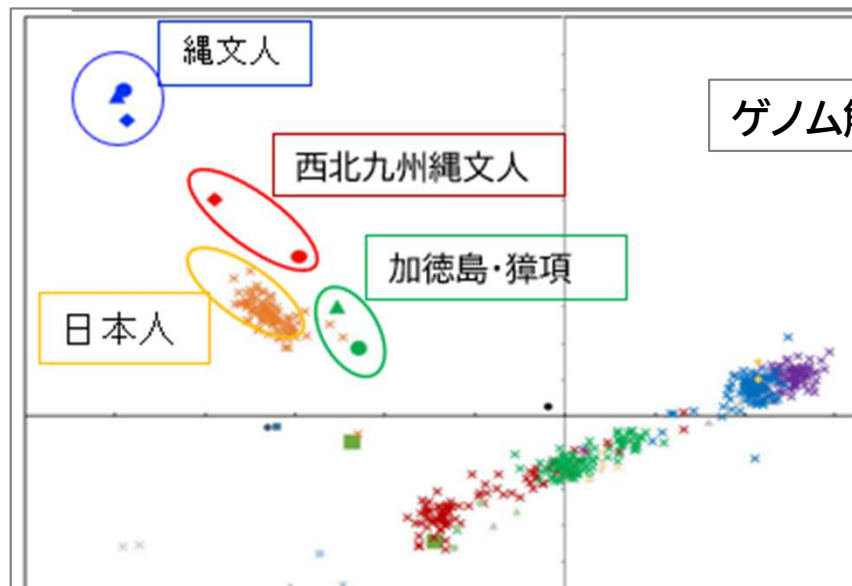
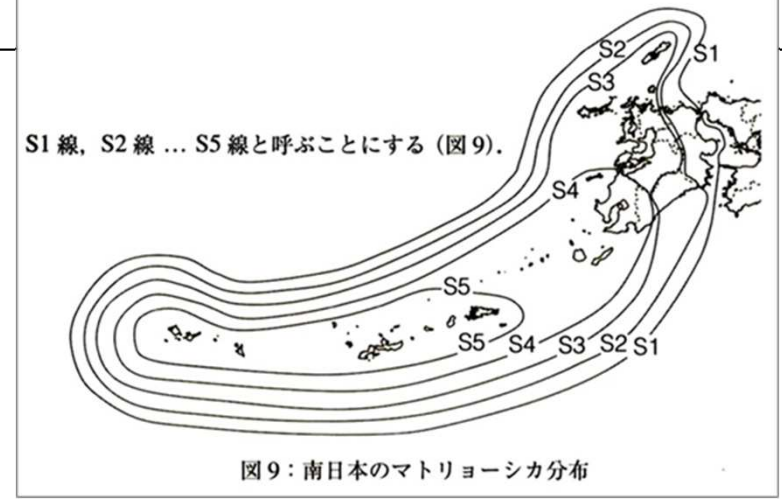


現在公式に採用されている沖縄の歴史と最新科学の示す歴史の差 ①

- 現在、宮古島市史など公式に採用されている歴史：現在有力な歴史は、
 - 発掘された人骨の示す**旧石器時代の人は、絶滅し**、
 - 縄文時代に**九州から本土人が移住し**
 - 有史時代になって、農耕を持った弥生人が九州から移住し**、
 - 人も文化も本土から渡って来たことになっている。
 - 旧石器人の絶滅は、港川人の骨に残されたハリス線が証拠で、沖縄の島は、生存が難しいことを示しているとした。**
- 最新科学の示す結果は
 - 絶滅したとされる時期は、氷期の最厳寒期を越え、気温が上昇し、海面は低い時期で、島としては面積が大きかった時期に当たり、居住環境としては、最も良好な時代で、絶滅とは無縁の時期。
 - 最新の、白保竿根田原洞穴遺跡の発掘成果では、考古資料の断絶の時期は下記の2時期。
 - 1.3~1.1万年前
 - 8~5千年前
 - 1.3~1.1万年前について：**1万4千年前から7千年前まで、沖縄から九州へ盛んに移住が行われて時期で、沖縄側の人の絶滅は無い**
 - この時期には九州は、2万9千年前：**始良カルデラの火砕流と火山灰で九州・四国・中国の人が消失して、植生や人がやっと戻り始めて来た時期。**
 - 1万1千年前：**桜島サツマ火山灰で、南九州は灰に埋もれ絶滅した時期**
 - 7千3百年前：**鬼界カルデラの破局的噴火で、九州・四国・中国の縄文人が絶滅。**
 - 従って、沖縄から九州への人の流れはあっても、九州からの人の流れは無い。
 - 8~5千年前 **7000~2500年前の沖縄の土器群が連続性をもって発掘されており、断絶は無い。**

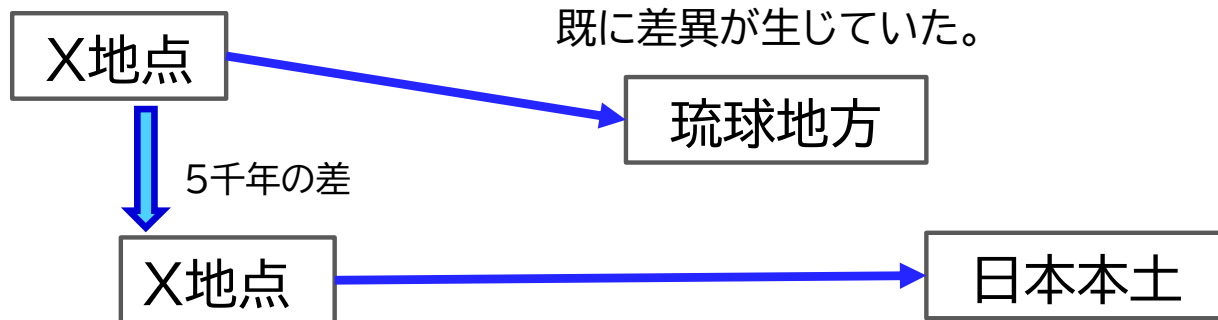
X→A 、 X→B ②

- 倭人の血の入った沖縄人が海洋性航海民として活動を続けたとすると沖縄本島等から交易を重ねるだけでなく、人と言葉を奄美や種子島・九州へも拡大したものと推定される。
- 奄美諸島・種子島・九州地方には、以前の沖縄縄文人が居た。その縄文人との混血を行い、交易を重ね、勢力の拡大が行われたと推測する。
- 混血が行われた結果の人々は「倭人の血の入った沖縄人」と縄文人の混血になり、丁度、西北九州縄文人となる。
 - 西北九州縄文人は少しなまった琉球語を使用したと推測。
- その行動は、日本国と言う制約のない時代には朝鮮半島・特に南部には積極的に行われたと推測。
- そう理解すると、半島南岸の加徳島の6300年前の人骨の持ち主が、倭人の血の入った沖縄人とみるのが、理解し易い。



解析による下本山弥生人、縄文人、東アジア人の比較結果
 本山2号・3号はそれぞれ17,138 SNPsと145,952 SNPsを含む。B. 131K SNI
 2号・3号はそれぞれ512 SNPsと3,474 SNPsを含む。

- 現在ある最新のDNA関係の情報を加味して検討すると、
 - X地点は、断定できないとしても、中国大陸と推定。
 - そこから、6300年以上前(7千年前と推定)にX地点より、倭人が沖縄本島に移住し、縄文人と混血が行われた。 日琉祖語を使用。
 - 宮古島では先住民を排除して倭人だけが住む島とした。 日琉祖語を使用。
 - 従来から沖縄住民が行って来た海洋交易は継続され、沖縄から倭人と縄文人が混血した沖縄人が九州地方や朝鮮半島まで活動が行われた。その結果、倭人の血が入った西北九州縄文人が生まれ、活発な活動が行われた。
 - 朝鮮半島の松菊里遺跡に入って来た戦国春秋の呉難民のもたらした水田稲作の有意性を理解した西北九州縄文人は、北九州に、水田稲作を導入し、成功し、瀬戸内海沿岸地方までその範囲を広げた。
- 凡そBC3世紀に、X地点に居た倭人が大挙日本本土へ移住して来た。
 - この倭人の使う言語は、日琉祖語ではあるが、変化していた。
 - 琉球諸島の言葉は、原型に近く、他の民族の影響が少なく、純粋型の言語。
 - 中国大陸のX地点の言語は、琉球分岐後5千年が経て、しかも、他民族との影響を受ける機会が多い為、変化していた筈。
 - 日本本土に来た倭人は、この変化したX地点の言語を使用していた。
 - 従って、琉球諸語と日本語とは、日本上陸時点で、差異を持っていたと推定する。
 - トマ パール氏が指摘したように、文書で残された時点で、日本語と琉球諸語は、既に差異が生じていた。



- 「日本語・琉球諸語による歴史比較言語学」著者:平子達也/五十嵐陽介/トマ・ペラール の発売があり、その紹介のインタビュー記事が掲載された。
- この書籍は、「歴史比較言語学」を紹介したもので、日本語・琉球諸語は材料として使用したもので、日本語・琉球諸語自体を解明したものでは無かった。(歴史比較言語学に関しては、コメントしない。)
- 紹介インタビュー記事には、日本語・琉球諸語の成り立ち、経過が、「歴史比較言語学」の成果として記されている。
 - 日本語の祖先は、朝鮮半島を経由して、九州から日本列島に定着し、広まった。
 - 琉球諸語は、日本語とは九州で分岐した。
 - 稲作が両者に共通し、稲作を元に、移動・拡散が行われた。
 - 日本国内に稲作が伝えられた時期は、紀元前10世紀から紀元後3世紀頃で、その時は分岐していなかった。
 - 琉球諸語は日本語とは、3～6世紀くらいに分岐した。
 - 8世紀に、文献が初めて残された時期には、日本語と琉球語が分岐していた。
- このインタビュー記事に疑問を持ち、「古代の朝鮮半島と日本」と「琉球・沖縄の古代史」を再検討し、確認した処、
 - 日本語・琉球諸語が、最初に朝鮮半島に伝わり、それが九州・日本本土に伝わった事実はない。
 - 稲作をベースに九州から琉球列島へ琉球諸語とその話者が伝わった事実はない。
 - 水田稲作が琉球列島へ伝わった時期は、10世紀以降。
 - 8世紀には、日本語と琉球語が分岐していた。これは事実。
- 日本語・琉球諸語について、「日本→琉球」又は「琉球→日本」を想定して検討しているが、「X地点→日本、X地点→琉球」としての検討もすべきだと考え実施した。
 - X地点から6300年以上前に、琉球へ移動・伝播
 - 琉球列島で、縄文人と倭人が混血し、琉球諸語が母国語となり、琉球から北上し、九州・朝鮮半島まで拡散。
 - X地点から紀元前3－2世紀に、九州を含む日本本土(除く北海道・琉球・沖縄)へ移動・伝播
 - 日本語を話す倭人は、九州に到来していた西北九州縄文人と争いが発生したが、打ち勝ち、日本全土に拡散した。
- インタビュー記事とは別の日本語・琉球諸語の移動・伝播経路が、事実を基に想定されることになった。